児の泣きに対する母親の育児困難感尺度の開発

著者	田淵 紀子
著者別表示	Tabuchi Noriko
雑誌名	平成16(2004)年度 科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書
巻	2203-2004
ページ	59p.
発行年	2005-03
URL	http://doi.org/10.24517/00049426

Creative Commons : 表示
http://creativecommons.org/licenses/by/3.0/deed.ja

KAKEN
2004
89
金沢大学

児の泣きに対する母親の育児困難感尺度の開発

課題番号　15592259

平成15年度～平成16年度科学研究費補助金　　基盤（C）（2）研究成果報告書

平成17年3月

研究代表者　田淵紀子
（金沢大学医学部助教授）

金沢大学附属図書館
0500-04184-9

目　　　次

はしがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
研究課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
研究組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
研究経費・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
Ⅰ．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
Ⅱ．研究目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
Ⅲ．研究の意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
Ⅳ．研究計画と手続き・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
Ⅴ．研究成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　1．文献レビューの概括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　2．泣きに対する育児困難感尺度の作成・・・・・・・・・・・・・・・ 11
　　1）尺度項目の構成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
　　2）尺度項目の妥当性の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
　　3）作成尺度の予備調査と信頼性･妥当性の検討・・・・・・・・・・ 12
　3．育児困難感尺度を用いた質問紙による調査の実施・・・・・・・・・14
　　1）対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　　2）調査期間・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　　3）調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　4．育児困難感尺度の信頼性と妥当性の検討・・・・・・・・・・・・・ 14
　　1）データ収集・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　　2）対象の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　　3）尺度項目決定のための分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
　　4）尺度の信頼性と妥当性の検討・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
Ⅵ．考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
　1．児の泣きに対する困難感尺度の構造について・・・・・・・・・・・ 17
　2．児の泣きに対する困難感尺度の信頼性について・・・・・・・・・・ 17
　3．児の泣きに対する困難感尺度の妥当性について・・・・・・・・・・ 18
　4．研究の限界と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

Ⅶ. 総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19

引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

図表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

第 19 回日本助産学会学術集会（2005.3.20）京都　一般演題発表抄録・・・・・・・・ 43

資料

資料１　調査用紙・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

資料２　調査協力施設へのお願い・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51

資料３　調査協力施設一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 52

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53

図表一覧

表 1　対児感情評定尺度：花沢成一・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

表 2　Maternal Attachment Inventry(Revised)：Muller・・・・・・・・・・・・ 25

表 3　MAI-J：中島・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

表 4　PSI と日本版 PSI の因子構造の比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

表 5　時期別の泣きへの困難感を表す項目と困難指標・・・・・・・・・・・・・・ 28

表 6　泣きに対する困難感に関連すると思われる要因・・・・・・・・・・・・・・ 29

表 7　泣きに対する困難感に関連する要因の相関・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
（これまでの研究結果より一部抜粋）

表 8　泣きに対する困難感尺度の構成と要因・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

表 9　泣きに対する感情・情動尺度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
（受容的情動・非受容的情動全 20 項目）

表 10　泣きに対する感情・情動尺度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
（受容的情動・非受容的情動計 10 項目抜粋）

表 11　対象の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

表 12　泣きに対する困難感尺度の構成因子と負荷量・・・・・・・・・・・・・・ 35

表 13　泣きに対する困難感尺度と BDI-Ⅱおよび感情・情動尺度との相関・・・・ 36

表 14　対象の背景別困難感得点の比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

図 1　泣きに対する困難感の概念枠組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

図 2　母親の初経別困難感得点の比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

図 3　母親の性格傾向別困難感得点の比較・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

図 4　泣き声で気をつかう人の存在別困難感得点の比較・・・・・・・・・・・・・ 41

図 5　生活環境に対する想いと困難感の関係・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

はしがき

これは、平成15年度～平成16年度に文部科学研究費補助金の交付を受けて行った「児の泣きに対する母親の育児困難感尺度の開発」についての研究報告書である。

近年、子どもの虐待に関する事件が多発している。子どもの虐待の原因の一つに、児が泣きやまないことによる感情抑制不足があげられており、児の泣きは養育者にとってストレス源となりえるものである。また、出生後早期の児の泣き声から児の要求を判別することは難しく、母親の不安を増長させうる。児が泣いたとき、母親が不安を感じたり、対応に困難感を増大すると、その後の育児行動の喚起を妨げ、ひいては育児ノイローゼや虐待を生じさせる危険性につながるものである。このような状況を予知し、不安の軽減や育児困難感に貢献できるケアへと活用するために、母親の児の泣きに対する困難感を測定するための尺度開発を試みた。

今回は、児の泣きに対する育児困難感尺度の開発として、尺度の作成プロセスを記述するとともに、育児困難感尺度を用いた調査結果から、尺度の信頼性と妥当性についての検討結果を集約した。

今回開発した児の泣きに対する育児困難感尺度は、2因子、11項目から構成され、おおむね高い信頼性と妥当性が得られた（累積寄与率 41.2%、Cronbach's α係数 0.84。ベックの抑うつ尺度第2版との相関係数 $r=0.421$ $p<0.001$、自作の感情・情動尺度（$\alpha=0.86$）との相関係数 $r=-0.642$ $p<0.001$)。本尺度は、1ヶ月時の子どもの泣きに対する母親の困難感に焦点をあてたものであり、出生後早期の臨床への適用の可能性が示唆された。今後、さらに尺度の精度を高め、育児困難感のスクリーニング尺度として活用していくことで、母子への支援につなげていきたいと考える。調査に御協力いただいた関係機関の皆様に心より感謝申し上げます。

2005年3月

研究代表者　　田淵　紀子

研究課題：児の泣きに対する母親の育児困難感尺度の開発

研究組織

研究代表者：田淵　紀子（金沢大学医学部助教授）

研究分担者：島田　啓子（金沢大学医学部助教授）

研究分担者：坂井　明美（金沢大学医学部教授）

交付決定額（配分額）

（金額単位：　円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 15 年度	700,000	0	700,000
平成 16 年度	500,000	0	500,000
総計	1,200,000	0	1,200,000

研究発表

1．田淵紀子，島田啓子，坂井明美；1ヶ月児の泣きに対する母親の困難感尺度の開発，第 19 回日本助産学会学術集会，於：京都，2005 年 3 月 20 日．

Ⅰ．はじめに

乳児の泣き声は産声に始まり、その後数ヶ月間、乳児の内的情報を伝達する最も顕著な行動である。乳児は、泣くことによって自分のニーズを母親に伝えるが、特に言葉を獲得する以前の時期においては、自らのニーズを伝達する重要な手段の一つとなる。しかし、出生時から２～３ヶ月頃までは、咽頭・口蓋の発達上、音声分析をしない限りは、泣き声の区別はつきにくい。とくに育児経験が初めての母親の場合は、児の泣き声はいつも同じように聞こえ、泣き声から児の要求を判断することは難しい（田淵，1997，田淵他，1996）。育児経験のある母親の場合は、授乳時間や乳児のしぐさ（指や手を口に持っていく、口をパクパクさせる）などから、泣きの意味を予測していることが多い（田淵，1999）。いずれにしても、児のニーズにあった対応がなされなければ、児は泣き続けるであろうし、母親は児がなぜ泣いているのかわからなければ、児の泣きに翻弄され、育児困難感や不安を増大させる結果となる。

乳児の泣きに関する研究には、1960年代より、新生児期から６ヶ月までの泣きに関する自然史的研究（Wolff，1969）や、音声スペクトル分析（Wasz-Hockert，O.，1963）によるもの、ダウン症児や出生時仮死など医学的に問題となる児の泣き声の特徴が明らかにされている（Lind, J., et al., 1970，大井，1973，大井他，1973）。しかし、sound spectrogram などを用いたこれらの音響学的分析研究は、主に異常の診断を目的としたものである。

また、大人の認知や対処行動の比較研究では、高リスク児と低リスク児の泣き声をスピーカーで幼稚園児をもつ母親に聞かせ、どのような反応をするかを調査したもの（足立他，1984b）や、母親と看護学生に新生児の４種類の泣き声のテープを聞かせ、意味の同定とその理由を調査したもの（脇田他，1991）、新生児の泣き声に対する母親の知覚と啼泣後の対処行動を研究したもの（茅島他，1988，足立他，1984a）などがある。母親は新生児の泣き声に対し、健康的、強い、良い、うれしいと知覚し、初産婦は経産婦より泣き声を高い、うるさい、刺激的と知覚する傾向や、抱く、おむつ交換、授乳、身体接触、話しかけなどの行動が観察されている。また、養育経験、妊娠時

の感受性の増大、養育者に対する社会的役割期待などの要因が、乳児の泣き声に対し母親を適切に方向づけることが示唆されている。一方、母親が児の泣き声に対して弁別する能力にかかわる要因に関しては、母の年齢、子どもの数、子どもの性別、子どもの年齢、授乳の方法、出産の方法、出産時に使われた薬剤などが検討され、８割以上の母親が自分の子どもの泣き声を聞き分けられたが、これらの要因は母親が児の泣きを聞き分ける成功率に影響をもたらしていなかった（Morsbach,G.,&Bunting,C., 1979)。このように、児の泣き声に対する母親の反応は複雑な要因の絡みによって生ずるものと考えられる。

最近、多発している子どもの虐待の原因の一つに、児が泣きやまないことによる感情抑制不足があげられている。これは児の泣き声が、母親を引き寄せるものであると同時に、ストレス源ともなりえているからであろう。川井他（1994, 1995, 1996, 1997, 1998）は、母親の一連の不安に関する臨床研究の中で、児の泣きが母親の育児に関する不安や抑うつ感を高めることを示唆している。児の泣きに対し、不安や困難感を増大させることは、その後の育児行動の喚起を妨げ、ひいては育児ノイローゼや虐待を生じさせる危険性につながるものと考えられる。したがって、このような状況を予知し、母親の不安の軽減や育児困難感に貢献できる支援プログラム開発が必要であり、そのために、まず、母親の育児困難度を測定できるような尺度を開発する必要があると考えた。

Ⅱ．研究目的

児の泣きに対する育児困難感尺度を作成し、１ヶ月時の母親の困難感スクリーニングの尺度として有用性を検討する。

Ⅲ．研究の意義

筆者はこれまでに、出生後早期より縦断的に児の泣きに対する母親の反応を質的にとらえてきた(田淵，1997，1999；田淵他，1998，2001a)。その後、

さらに、出生後１ヶ月から生後１年児の泣きに対する母親の困難感の実態を明らかにし、児が泣いた時の母親の感情・情動反応に関する調査研究を縦断的におこなってきた（広中他，2002；近藤他，2001；田淵他，2001b，2002a，2002b，2003，2004）。本研究はこれらの研究結果をベースとしている。横断的な調査はいくつか報告されているが、出生後より生後１年を追跡して縦断的に捉えた結果をベースにしていることが本研究の特徴である。これまでの筆者の研究報告は、児の泣きに困難を感じている母親の心理過程やその背景に関する情報を提供するとともに、母親の育児支援に大きく貢献し、また母親の不安の軽減に効果が期待できるものである。本研究の育児困難感尺度が開発されることで、児の泣きに対して困難感を示すリスクのある母親が早期にスクリーニングされ、母親および家族への支援につながるものと考えられる。

用語の定義

「泣きに対する育児困難感尺度」とは、児が泣くことによって感ずる育児に対する不安や困難な感情および育児を負担に思うなどのストレスの程度を測定しようとするものである。

Ⅳ．研究計画と手続き

１．課題に対する国内外の文献を検討する。

２．泣きに対する育児困難感尺度の作成

１）尺度項目の構成を検討する。

これまでに行ってきた母親に対する面接と生後１ヶ月、４～５ヶ月、１年時の縦断的調査の分析結果から、母親の育児困難な状況やそれに関連する要因などを整理し、泣きに対する育児困難感の概念枠組みおよび母親の育児困難感の尺度項目を作成する。

２）尺度項目の妥当性を検討する。

作成した尺度の内容妥当性は、育児を経験したことのある母性看護の研究

者および看護者等５名の協力を得て行う。項目数の量と回答の難易度、回答に要する時間などを検討する。

３）作成尺度の予備調査と信頼性･妥当性を検討する。

（１）尺度の予備調査は、出産後１ヶ月の母親５名を対象に実施する。

（２）予備調査結果から表現のわかりにくいところ等を修正および検討を行う。

３．泣きに対する育児困難感尺度を用いた質問紙による調査の実施

１）対象：研究承諾の得られた複数の出産施設で、１ヶ月時健診受診の母親

２）調査方法：

（１）調査協力機関への依頼

近県の出産施設に調査の目的および調査所要時間、調査の協力の有無が診療サービス等に影響しない旨を記載した文書とともに調査用紙を配布し、調査の協力を依頼する。

（２）調査対象への調査依頼

研究承諾の得られた出産施設において、調査の目的および調査所要時間、調査の協力の有無が診療サービス等に影響しない旨を記載した文書を配布し、調査協力に承諾された母親に対し、返信用封筒とともに質問紙を配布し、後日郵送にて回収する。

４．育児困難感尺度の信頼性と妥当性の検討

１）データ収集およびデータ入力を行う。

２）尺度項目決定のための分析を行う。

（１）項目分析を行う。

（２）I-T 相関分析を行う。

３）尺度の信頼性と妥当性の検討を行う。

（１）構成妥当性は主因子分析を行う。

（２）内部一貫性は Cronbach's α係数を求める。

（３）基準関連妥当性として､既存のうつ尺度などとの相関係数を求める。

以上の分析は、統計解析ソフト SPSS 11.5J for Windows を用いる。

V．研究成果

1．文献レビューの概括

“crying”, “stress”, “scale”, “screening”, “infant care”, “母子関係”等の key words から育児にかかわる国内外の文献や尺度等を中心に検討した。母親の育児全般に対する不安や、母子相互作用や愛着に関するもの、育児ストレスを測定するものなどがみられたが、児の泣きに着目したものはなかった。以下に、1）母親の育児不安、2）母子相互作用・愛着、3）育児ストレスについて概括する。

1）母親の育児不安について

川井他（1994）によると、0歳から3歳未満の児をもつ母親766名を対象にした調査の結果、育児不安の因子として、「不安・抑うつ感因子」と「育児困難感因子」の2因子が抽出されている。「不安・抑うつ感因子」については、子どもへの現在の不安、現在の心配、夫婦関係、対人関係などにこの因子の傾向がつよいことが示され、広範囲にわたる背景をもっていることが特徴的であった。「育児困難感因子」には、同様の要因と有意な関連がみられているが、子どもの状態と関わりなく育児上の不安を示すことから、この心的状態は「育児不安」の本態に近いものであると指摘されている。さらに、川井他（1995, 1996）は、3歳から7歳未満の児をもつ母親1242名のデータを加え分析した結果、育児不安の本態は、育児困難感にあるのではないかとの仮説を提起した。「育児困難感」因子を構成するものとして、3歳未満児、3歳以上児の母親共に、「子どもをうまく育てていると思えない」「子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある」「子どものことが煩わしくて、イライラする」「叱りすぎるなど、子どもを虐待しているのではないかと思うことがある」の 4 項目をあげ、「中核的育児困難感」因子と命名し、育児不安の本態であると示唆している。さらに、育児困難感のプロフィール評定尺度（川井他，1998）の作成により、0歳児群で育児困難感の強いものは、母親の抑うつ傾向、子どもへのネガティブな感情が高得点を示し、この時期

の育児困難感の主たる背景要因であることが示されていた。

2）母子相互作用・愛着について

Attachment（愛着）は、「子どもが母親（あるいは母親に代わる人物）との間に形成する愛情の絆」であるという概念としてBowlby,J.によって1958年に提唱された。そしてこの愛着形成には、子どもからの信号や行動に母親がタイミングよく反応する母子相互作用的な関係が重要であるとされている。

一方、母親の子どもに対する愛着をMaternal Attachment とし、「赤ん坊が自分の人生の中で重要な位置を占めていると母親が感じる程度」や、「養育行動を通じて形成される養育者の子どもに対する特定的で、永続的な情緒的絆」としてとらえられ、母性的愛着ともよばれている。この、母親愛着の程度を評価する指標として、これまで愛情感情や愛着行動を測定する尺度、胎児に対する愛着尺度などが開発されてきた（Avant K., 1982, Catter J.L.,1981, Huckaby L.1987, Waters et al,1985)。ここでは、尺度の信頼性と妥当性が検討されてきた代表的なものとして、花沢（1992）の対児感情評定尺度と、Muller（1994） の開発したMaternal Attachment Inventry（以下、MAIとする）の作成過程について以下に述べる。

対児感情評定尺度は、子どもに対する感情評定尺度として開発されたもので、子どもへの接近感情と回避感情をみるための項目で構成されている。作成の手順は、1976年に大学生と幼児をもつ母親約100名に、赤ちゃんを頭に思い浮かべたときに、どのような言葉を思い出すか、できるだけたくさん自由に記入してもらい、その回答から適切と思われる31語を選出している。回答は、4段階「非常にそのとおり・そのとおり・少しそのとおり・そんなことはない」の中のどれか一つを選択させる形式とし、未婚女性37名を対象に予備調査を行い、項目分析の結果、26項目抽出している。この項目で、妊婦223名、母親218名、未婚女性97名に実施したが、項目に“～したい”という言葉が入っていること、回避感情の項目が少ないなどの問題点が明らかになった。そのため、項目はすべて形容詞で統一し、接近項目と回避項目の数を同数にするなどの改訂を行なっている。改訂の過程は、ふたたび、大学生と看護学生を対象に、赤ちゃんを頭に思い浮かべたときに、どのような形容詞を思い出すか、自由記述法により記述してもらい、辞書からも対児感

情を表す形容詞を収集している。収集された形容詞の中から、接近感情をみるための項目と回避感情をみるための項目を19語ずつ選択し、大学生58名、看護学生 37 名、褥婦 5 名に実施している。得られた資料は、G-P 分析（good-poor analysis）を中心とした項目分析により、28項目で構成されることになった（表 1)。この尺度の妥当性は、幼稚園児の母親を対象に田研式・親子関係診断テストで母親の幼児に対する態度と対児感情得点との関係からと女子高生 54 名に対して赤ちゃんが好きかという質問に対する回答傾向から検討されている。尺度の信頼性については、女子大生 35 名を対象に、同一個人に 6 月と 11 月の 2 回再検査法を実施し、接近得点、回避得点ともに r=0.85 と高い相関関係を得ている。また、助産婦学校入学生の入学試験時と 5 月の再検査法では、接近得点は r=0.56、回避得点は r=0.39 という結果を得ている。この尺度は、赤ちゃんに対する感情の評定尺度として、世代間や性差間での比較検討も行われている。しかし、尺度の作成過程において、大学生や女子高生、看護学生など未婚女性を対象に検討されてきた経緯があり、今まさに乳児をもつ母親を対象として検討を重ねてきたものではなかった。

Muller(1994)は、母親の愛着を「母親と乳児との間に発達し長期に持続するユニークな愛情関係」と定義し、愛着および母親適応の文献レビューから51項目を選び出した。この尺度の特徴は、はじめての母親が経験すると思われる子どもに対する考え（thought)、気持ち（feeling)、状況（situation）を表現していることにある。その後、母親愛着について概念がわかる専門家、母親、小児ナースなどから構成された 12 名で、内容・表面妥当性を検討した。その結果、31項目に精選し、4段階リッカート評定による尺度としている。そして、米国において産後 1 ヶ月の母親 196 名、4 ヶ月の母親 62 名、8 ヶ月の母親 84 名の調査を実施し、信頼性と妥当性を検証している。Cronbach'α係数は、1 ヶ月調査では 0.85、4 ヶ月では 0.76、8 ヶ月では 0.85 であった。また、妥当性については、3 つの他尺度との併存妥当性を検討し、一定の相関が認められている。そして、全項目間相関の低かった 5 項目を削除し、26 項目を選定し改訂版 MAI 尺度としている（表 2）。太田（2001）は、改訂版 MAI 尺度 2 6 項目の和訳の適正について、長期在米体験を有し、英語が堪能な日系看護教官 2 名に依頼し、助言を得て再検討し、一部修正を

行っている。その後、健康な乳児（1～8ヶ月）をもつ母親150名にプレテストを行い、使用可能である（Cronbach's α係数 0.94）ことを確認し、最終的な日本語版 MAI 尺度としている。中島（2001）も、同様に検討しているが、英語から日本語への翻訳は、職業翻訳家3名が別々に行い、2名以上の翻訳文の意味内容が一致するものを選択し、日本語の修正を加えている。原文の意味が反映されていなかった2項目について、米国と日本で臨床経験があり、バイリンガルである助産婦にコンサルテーションを受け日本版の翻訳を修正した。次に英語を母国語とするバイリンガルである職業翻訳家1名が日本語から英語への逆翻訳を行い、日本版の翻訳文が原文の意味を反映しているかどうかを検討している。そして、日本版 MAI の信頼性・妥当性の検討として、1ヶ月乳児検診の母親 255 名を対象に行っている。Cronbach'α係数は 0.92、安定性は r=0.84（$p < 0.000$）であった。主成分分析と因子分析から、日本版 MAI は、1次元に近い構造を示していた。併存妥当性として用いた対児感情評定尺度との相関は r=0.38（$p < 0.05$）で、支持されるほどの関連はなかったとされている。この尺度の信頼性は、支持されたといえるが、妥当性については、情意領域の母親の愛着を測定する尺度としては十分支持されているとはいい難い。母親の愛着尺度日本版（中島，2001）の項目を表3に示した。

3）育児ストレスについて

母親の育児ストレスを測定するために開発されたものに Parenting Stress Index(以下、PSI とする)（Abidin RR., 1983）がある。PSI は、子どもの気質的特徴や、親のパーソナリティー、親の社会的因子等から多面的に育児ストレスを測定する 101 項目からなる質問紙である。原版は、米国の1歳から 12 歳までの子どもを持つ親を対象に、信頼性と妥当性が検証されている（Abidin RR., 1990)。原版 PSI は、子どもの特徴に関わるストレスは 47 項目で、子どもの散漫性／多動性、親を喜ばせる度合いなど6下位尺度から構成されている。日本では奈良間他（1999）が日本版 Parenting Stress Index(PSI)の信頼性と妥当性を検証している。日本版 PSI は、乳幼児健診来所中の母親 1109 名を対象とし、因子分析の結果、原版とは異なる 78 項目 15 下位尺度としての使用が妥当とされている。子どもの特徴に関わるストレ

スは7因子抽出され、累積寄与率は44.6%、親自身に関わるストレスは、8因子抽出され、累積寄与率は48.6%であった。表4にPSIと日本版PSIの因子構造の比較を示した。

以上のように、育児に関連した尺度はいくつかみられたが、日本で使用するには愛着に関する尺度の妥当性はいまだ十分ではなく、ストレスに関する尺度は項目数が多いなどの欠点があった。また、児が泣くことに関連して生じる育児困難な状況や感情を測定するような尺度は見あたらず、尺度の開発の必要性があると考える。

2．泣きに対する育児困難感尺度の作成

1）尺度項目の構成

これまでに行ってきた母親に対する面接と生後1ヶ月、4～5ヶ月、1年時の縦断的調査（広中他，2002；近藤他，2001；田淵，1997，1999；田淵他，1998，2001a，2001b，2002a，2002b，2003，2004)より、母親の育児困難な状況やそれに関連する要因などを整理した。これらの研究では、時期ごとに母親が感じるであろう児の泣きに対する困難な状況を想定し、その状況ごとの得点を算出し、母親の困難感得点とした（表5）。また、児の泣きに対する困難感に関連すると思われる要因を表6に示したが、その困難感得点とこれらの要因との相関係数を求めることで、泣きに対する母親の困難に関連する要因の抽出を行なってきた。その結果、泣きに対する困難感には、1ヶ月時では、「泣きの性質」、「寝入りの状況」、「夜間授乳負担」、「母親の健康状態」、「睡眠に対する満足」、「育児経験」などが、4～5ヶ月時では、「母親の神経質な性格傾向」や「サポートに対する満足度」が、1年時では、「夜泣き」と「睡眠の中断」などと相関が高く、関連要因と考えられた（表7）。さらに、母親の「育児充実感」、「育児自信感」、「育児負担感」、「育児の見通し」などとも相関していた。これらの要因とPSIを参考に、泣きに対する困難感の概念枠組みを考案した（図1）。本研究において、尺度の構成要素を次のように考えた。まず、母親が子どもの泣きをどうとらえているかという『認知』、周りのサポートなどの『環境』、母親自身の子どもの泣きの解釈・対応能力などの『知識と行動』、母親自身の生活や育児に対する『想い』などの分野に分

類し、12 要因 67 項目の文章を設定した。とくに、“泣き”との関係性を重視した文章表現に心がけた。今回開発の尺度は、児の泣きが母親の育児を負担に感じさせるような困難な感情やストレスの程度を測定するものとし、育児負担を抱きやすい母親を 1 ヶ月時に発見するためのスクリーニングとして活用できることを念頭に、なるべく数少ない項目に厳選していき、17 項目とした。各項目ごとに母親の抱く感情やストレスの程度がわかるように、4 段階リカート尺度とし、得点が高いほど、泣きに対する困難性が高いことを示す文章表現とした（表８）。

２）尺度項目の妥当性を検討する。

作成した尺度が、測定したい構成概念と理論的に合致したものかどうか、不適切なものを除外するために、育児を経験したことのある母性看護の研究者および看護者等５名の協力を得て行った。項目数の量と回答の難易度、回答に要する時間などを検討した。

３）作成尺度の予備調査と信頼性･妥当性の検討。

（１）尺度の予備調査は、出産後 1 ヶ月から 4 ヶ月の母親 3 名を対象に実施した。

（２）予備調査結果から表現のわかりにくいところ等を修正した。

（３）基準関連妥当性をみるための尺度として、「うつ尺度」と「感情・情動尺度（田淵他，2000，2002a)」を選定した。うつ尺度は、母親のうつ傾向をみるものであり、育児不安と強い関連がある。川井他（2004）は、育児不安は、自信のなさや心配、困惑、母親としての不適格感などで構成されていると述べており、今回測定しようとしている「泣きに対する育児困難感」の内容を包括するものであった。また、筆者のこれまでの研究結果より、児の泣きに対し困難感を抱く母親は、そうでない母親と比べ、児の泣きに対する感情･情動得点が低くなるという非受容的な情動を抱くことがわかっている。したがって、これらの尺度を用いることにより、尺度の妥当性を検証できると判断した。うつ尺度に関しては、Zung 自己評価式抑うつ尺度日本語版、日本版エジンバラ産後うつ病自己評価票や Beck 抑うつ尺度（BDI; Beck Depression Inventory）などがある。BDI は、Beck et al.（1961）によって開発され、うつ病患者における重症度判定にも、また一般集団でのうつ病の

スクリーニングにも有用な評価法として、広く受け入れられている。初版のBDIは、抑うつ症状を伴う精神科患者がしばしば訴え、またそうでない患者にはあまり見られない症状について、臨床的な観察と患者の訴えとを系統的に組み合わせ、代表的な症状や態度から 21 項目選択されている。これらの項目は、選択肢の内容の程度で評価されるようになっており、それぞれの項目に 0 から 3 までの 4 段階の得点が与えられる。その後、若干の修正を加えて BDI-ⅠA として出版された（Beck et al., 1979)。BDI-ⅠA は、最近の 1 週間における抑うつ状態についてたずねているが、BDI-Ⅱでは、今日を含めて過去 2 週間となっており、DSM-Ⅳの診断基準に基づいた抑うつ症状の有無とその程度の指標として開発された（Beck et al., 1996)。日本版 BDI-Ⅱは、小嶋と古川によって翻訳されたうえ、日本人での信頼性も検討され、高い信頼性が得られている（Beck et al., 1996　小嶋他訳，2003,)。このように、BDI は、長年検討され続けている尺度であり、心理学や精神医学の領域で現在、最も広範に使用されている（菅原，2001)。日本版 BDI-Ⅱは、原版と等価に翻訳され、日本人の抑うつ症状を測定するのに適した尺度として、今回この尺度を基準関連妥当性をみるための尺度に決定した。

また、「感情・情動尺度」（田淵他,2000）は、児の泣き声を聞いた時、“かわいい”、“うれしい”、“幸せ” など、いとおしいと感じるような受容的情動 10 項目と、“憎たらしい”、“イライラする”、“わずらわしい” など非受容的情動 10 項目、計 20 項目から構成されている。それぞれの項目に‘ほとんど思わない’、‘どちらかといえば思わない’、‘どちらかといえば思う’、‘思う’の 1 点から 4 点までの 4 段階リカート尺度により得点化している（表９)。最低得点は２０点、最高は８０点であり、非受容的情動項目の得点は逆転処理することで、得点が高いほど、受容的情動傾向を示すように表される。受容的情動項目のα係数は、0.89、非受容的情動項目のα係数は、0.90 であり、信頼性が確保されている。今回、これを一部改変し、受容的情動項目と非受容的情動項目を合わせて 10 項目に厳選した（表 10)。項目選定の基準は、これまでの分析結果から、得点分布に極端に偏りのあるものや、項目間の相関の高いもののうち一方を除外し、類似した項目がないようにした。また、児が泣くという状況は、育児困難な母親にとっては困難感を増大させる状況で

あると考えられるため、平常時の気持ちとの差をみるために、普段、児と接している時の気持ちについても、同様に設問項目を設けることにした。

3．育児困難感尺度を用いた質問紙による調査の実施

1）対象：研究承諾の得られた複数の出産施設で、1ヶ月健診受診の母親

2）調査期間：平成16年7月下旬から9月下旬

3）調査方法：

（1）調査協力機関への依頼

近県の26出産施設に研究目的、調査対象者、調査方法等を記載した文書とともに調査用紙を配布し、調査の協力を依頼した。

（2）調査対象への調査依頼

研究承諾の得られた26出産施設において、1ヶ月健診受診の母親に対し、調査の目的および調査所要時間、調査の協力の有無が診療サービス等に影響しない旨を記載した文書とともに、調査の協力を依頼した。調査に承諾された母親に対し、返信用封筒とともに質問紙を配布し、郵送による返信を依頼した。

4．育児困難感尺度の信頼性と妥当性の検討

1）データ収集

調査用紙は700部配布し、441名から回収（回収率63.0%）した。有効回答は425名（有効回答率96.4%）であった。

2）対象の概要（表11）

母親の平均年齢は29.5±4.4(17～42)歳であった。初産婦215名(50.6%)、経産婦210名（49.4%）で、ほぼ半数ずつであった。出産施設に入院中に、母児異室制をとっていたのは、120名（28.2%）であり、7割以上の母親は何らかの形で母児同室の経験があった。家族構成は、核家族が294名と約7割を占めていた。

3）尺度項目決定のための分析

（1）項目分析

泣きに対する困難感尺度の各項目において、それぞれ回答傾向に著しい偏

りはなく、ほぼ正規分布を示した。また、項目間で負の相関を示すものがないか確認したが、該当するものはなかった。

（2）I-T（Item-Total）相関分析

泣きに対する困難感尺度の項目間相関をみた。r＝0.8 以上で項目内容の類似しているものはなかった。また、尺度の各項目と全項目の合計得点の相関係数を求めて、r＝0.4 以下の項目が 3 項目みられたため削除した。

4）尺度の信頼性と妥当性の検討

（1）因子分析（表 12）

泣きに対する困難感尺度 17 項目のうち、項目分析と I-T 相関分析により 3 項目除いた 14 項目を採択し、主因子分析法、バリマックス回転をした結果、固有値 1 以上の 3 因子が抽出された。因子負荷量が 0.4 以下の 3 項目を削除し、11 項目で分析しなおしたところ、固有値 1 以上の 2 因子が抽出された。第 1 因子は 6 項目から構成され、その内容を解釈して「泣きに伴う育児負担」と命名した。第 2 因子は 5 項目から構成され、「泣きの対応と育児の自信」と命名した。第 1 因子の寄与率は 22.0%、第 2 因子を含めた累積寄与率は 41.2% であった。

（2）Cronbach's α係数による信頼性の検討

因子分析から採択された項目の第 1 因子である「泣きに伴う育児負担」の信頼性係数は、α＝0.768、第 2 因子の「泣きの対応と育児の自信」は、α＝0.776 で、全体の尺度としては、α＝0.840 であった。

（3）泣きに対する困難感尺度の妥当性

泣きに対する困難感尺度の基準関連妥当性として、「BDI-Ⅱ」および「感情・情動尺度」（田淵他,2004）との相関係数を示した（表 13）。「BDI-Ⅱ」との相関については、r＝0.421、p＜0.001 と有意な正の相関を示した。すなわち、困難感得点が高いほど、抑うつ傾向が強かった。

今回、新たに「感情・情動尺度」を一部改変したが、この改変尺度のα係数は 0.852 と高い信頼性が得られた。この尺度との相関においては、児が泣いた時では、r＝－0.642、p＜0.001、普段、児と接している時では、r＝－0.445、p＜0.001、といずれも有意な負の相関を示した。すなわち、困難感得点が高いほど、児に対して非受容的情動傾向が強かった。

さらに、普段、子どもと接している時と子どもが泣いた時の情動得点の差が大きかった母親ほど、困難感得点が高かった（r=0.451, p<0.001）。

（4）仮説の検証（図2）

今回開発の児の泣きに対する困難感尺度が、尺度として妥当性をもつなら、「初産婦のほうが、経産婦に比べて困難感が高い」という仮説をたて、これを検証した。初産婦における困難感得点の平均値は、26.9±4.0（SD）で、経産婦は、25.5±4.0（SD）であり、これらの検定を行なうと、有意に初産婦の方が高いことを認めた（p＜0.001）。したがって、この仮説は支持され、尺度の妥当性を確認できた。

（5）対象の背景からみた困難感得点

母親自身が自分のとらえた性格を楽観的か神経質かで 0～100 の visual analog scale（VAS）で点数化したものと困難感得点との相関をみたところ、r=0.273、p＜0.001 と有意な正の相関を示した。すなわち、自分の性格を神経質ととらえている母親ほど、困難感得点が高かった。全対象の母親の VAS による性格の平均は 50.6±22.4 点であったため、平均点±1 標準偏差により、神経質群,平均群、楽観群の 3 群に分類し、困難感得点を比較したものを図 3 に示した。神経質群は、27.6±4.3 点で、平均群 26.3±3.9 点、楽観群 24.4±3.6 点に比べて有意に高かった（p<0.01～0.001）。

母親の年齢と困難感得点には、有意な相関は見られなかった。また、児の栄養方法や出産で入院中の母児同室の有無、家族構成、住まいなどと困難感得点を比較したが、いずれも有意な差はみられなかった（表 14）。

しかし、子どもの泣き声で迷惑がかかるのではと気をつかう人の存在に対しては、‘いる’と答えた人（n=178）の困難感得点の平均は 27.7±3.6 点で、‘いない’と答えた人（n=204）の 24.8±4.0 点に比べ有意に高かった（p＜0.001）（図 4）。

また、住居環境、経済状態、時間的ゆとり、夫婦関係、家族関係、仕事、趣味の全項目において、今のままでよいと思っている現状満足型の人に比べて、今より改善したい、子どもができる前の状態に戻りたいなど現状不満足型の人の困難感得点は、有意に高かった（p＜0.05～0.001）（図 5）。

Ⅵ．考察

１．児の泣きに対する困難感尺度の構造について

「児の泣きに対する困難感尺度」は、児が泣くことによって抱く育児に対する困難な感情や、育児を負担に思うなどの母親のストレスの程度を測定するために開発した。当初、尺度の構成要素を、母親が子どもの泣きをどうとらえているかという『認知』、周りのサポートなどの『環境』、母親自身の子どもの泣きの解釈・対応能力などの『知識と行動』、母親自身の生活や育児に対する『想い』などから考えた。この考え方の基盤には、これまでに行ってきた縦断的な調査の分析結果をもとに、児が泣いた時の母親の反応と母親の困難さに関連していた要因から抽出した（広中他，2002；近藤他，2001；田淵，1997,1999;田淵他 1996,1998,2001a,2001b,2002a,2002b,2003,2004)。

今回、再構成された尺度は、「泣きに伴う育児負担」と「泣きの対応と育児の自信」の２因子からなる構造であり、育児に対する自信感や困難さ、および泣きに対する困難な感情やストレスの程度を測定する尺度となっていると考えられる。PSI は、母親の育児ストレスを測定する尺度であり、信頼性、妥当性ともに検証されている（Abidin RR., 1983)。しかし、原版は 101 項目からなり、日本版 PSI（奈良間他，1999）においても 78 項目と項目数が非常に多く、使用にあたっては母親の負担が考えられる。それに比べて、今回開発の尺度は 11 項目と少なく、スクリーニングとして活用に値すると思われる。

２．児の泣きに対する困難感尺度の信頼性について

尺度の信頼性とは、その尺度が測定していると考えられる属性をどの程度一貫して測定しているかということであり（河口，1997b)、内的整合性をみるために Cronbach's α 係数を求めた。「児の泣きに対する困難感尺度」11 項目の Cronbach's $\alpha = 0.840$ であった。この結果は、尺度としての内部一貫性が高く、信頼性のある尺度であることを示している。さらに下位概念となった第１因子の「泣きに伴う育児負担」の Cronbach's $\alpha = 0.768$ であり、第２因子の「泣きの対応と育児の自信」の Cronbach's $\alpha = 0.776$ であるこ

とから、いずれも Cronbach's α係数が 0.7 以上あり、内的整合性が確認できた。

3．児の泣きに対する困難感尺度の妥当性について

尺度の妥当性とは、尺度が測ろうとしている概念をどのくらい適切に測っているかということである（河口，1998)。評価方法として、基準関連妥当性、内容妥当性、構成概念妥当性などがある。

まず、構成概念妥当性をみるために行なった主因子法による因子分析の結果は、因子別の寄与率では、第１因子 22.0%、第２因子 19.2%であった。第２因子までの累積寄与率は 41.2%であり、因子数が全部で２因子と少数であることや、他の開発された尺度（中島，2001；奈良間他，1999）の累積寄与率と大差がないことから、妥当性について示唆されたといえる。

基準関連妥当性としては、外的基準として日本版 BDI-Ⅱと感情・情動尺度を用いた。日本版 BDI-Ⅱとの相関係数は、$r=0.421$（$p<0.001$)、児が泣いた時の感情・情動尺度とは、$r=-0.642$（$p<0.001$）と、いずれもかなり高い相関がみられた。日本版 BDI-Ⅱは、抑うつ傾向を測定する尺度として、高い信頼性と妥当性が得られている。川井他（1994, 1995, 1996, 1997, 1998）の一連の不安に関する臨床的研究の中で、児の泣きが育児に関する不安や抑うつ感を高めることが示唆されていることから、その抑うつ尺度と有意な相関がみられたことは、今回開発した困難感尺度の妥当性が高いといえる。

また、今回、感情・情動尺度（田淵，2000）を一部改変して使用したが、この改変尺度のα係数は、0.852 と信頼性の高いものであり、この尺度と本尺度が $r=-0.642$（$p<0.001$）と有意な負の相関を示した。この感情・情動尺度は得点が高いほど、児に対して受容的な情動傾向を示すように作られており、泣きに困難感を示すほど、児に対して非受容的な情動傾向となっていた。これらの結果は、川井他（1998）が、0歳児群で育児困難感の強いものは、母親の抑うつ傾向、子どもへのネガティブな感情が高得点を示していたことと同様の結果であった。

以上から、今回開発の困難感尺度は、抑うつ傾向と児に対する negative な感情傾向を包含しており、川井の育児不安の心性に対する見解を支持する

ものと考えられた。

4．研究の限界と今後の課題

本研究は、1ヶ月時健診受診の母親を対象として調査を行なったものであり、1ヶ月時点での臨床での適用が示唆された。しかし、調査対象となった出産施設は、正常出産が主体のところがほとんどであった。子どもの泣きは、母親の育児不安の要因となり得るものであるが、ハイリスク児の場合は、とくに母子分離期間も長く、子どもの成長発達に関して育児不安や困難感をより感じやすいものと思われる。したがって、今回開発した尺度が、すべての新生児の1ヶ月時点でのスクリーニングとして活用されるかは、今後さらに検討を要するところである。今後、調査対象者を増やし、尺度の精度を高めていきたい。

Ⅶ．総括

1）子どもの泣きに対する母親の困難感は、母親の育児経験、母親の性格傾向、周りで気をつかう人の存在、生活環境の満足度に関連していた。

2）子どもの泣きに対する母親の困難さを測定する尺度は、11項目から構成された。

3）尺度の因子分析から、第1因子は「泣きに伴う育児負担」、第2因子は「泣きの対応と育児の自信」と命名した。

4）本尺度のCronbach's α係数は0.84であり、高い信頼性を認めた。

5）本尺度の因子分析により、第2因子までの累積寄与率は、41.2%であった。

6）本尺度の基準関連妥当性は、BDI-Ⅱとは r=0.421、感情・情動尺度とは r=－0.642と高い相関関係があり、妥当性が認められた。

以上より、今回開発した「児の泣きに対する母親の育児困難感尺度」の信頼性と妥当性が検証され、有用性が示唆された。

引用文献

Abidin RR.:Parenting Stress index manual.1st ed, Pediatric Psychology press, 1983.

Abidin RR.:Parenting Stress index manual.third ed, Pediatric Psychology press, 1990.

Avant K.:Amaternal attachment assessment strategy. In Analysis of Current assessment strategies in the health care of young children and childbearing families, Humenick S., ed. Norwolk:Appleton,Century, Crofts,171-178,1982.

足立智昭，仁平義明，村井憲男：乳児の泣き声に対する母親の対処行動に関する研究．母性衛生，25（2），235-239，1984.

足立智昭，村井憲男，仁平義明他：新生児の泣き声に対する母親の対処行動とパーソナリティ特性との関連．母性衛生，25（4），466-467，1984.

Beck,A.T., Rush A.J., Shaw,B.F., et al.: Cognitive therapy of depression. Guilford Press, New York, 1979.

Beck,A.T., Robert,A.S. & Gregory,K.B.: Manual for the Depression Inventory-Second Edition. The Psychological Corporation, U.S.A., 1996.（小嶋雅代，古川壽亮訳：日本版 BDI-Ⅱ　－ベッグ抑うつ質問票－　手引き.日本文化科学社，2003.）

Beck,A.T., Steer,R.A.: Manual for the Beck Depression Inventory. The Psychological Corporation, San Antonio,TX 1987.

Beck,A.T., Ward,C.H., Mendelson,M., et al.: An inventory for measuring depression. Archives of General Psychiatry 4, 561-571,1961.

Catter,J.L., Promoting maternal attachment through prenatal intervention. Maternal Child Nursing, 6:107-114, 1981.

花沢成一：母性心理学，医学書院，1992.

広中啓子，田淵紀子，竹中友恵他：4ヶ月児の泣きに対する母親の困難感の実態とその特徴，日本助産学会誌，15（3），202-203，2002.

堀洋道，

Huckaby L.: The effect on bonding behavior of giving a mother her

premature baby's picture. Scholarly inquiry for Nursing Practice 1(2):115-129, 1987.

川井尚，庄司順一，千賀悠子他：育児不安に関する基礎的検討．日本総合愛育研究所紀要，30，27-42，1994.

川井尚，庄司順一，千賀悠子他：育児不安に関する基礎的検討　－幼児の母親を対象に－．日本総合愛育研究所紀要，31，27-39，1995.

川井尚，庄司順一，千賀悠子他：育児不安に関する基礎的検討Ⅱ　－育児不安の本態としての育児困難感について－．日本総合愛育研究所紀要，32，29-47，1996.

川井尚，庄司順一，千賀悠子他：育児不安に関する基礎的検討Ⅲ　－育児困難感のアセスメント作成の試み－．日本総合愛育研究所紀要，33，35-56，1997.

川井尚，庄司順一，千賀悠子他：育児不安に関する基礎的検討Ⅳ　－育児困難感のプロフィール評定試案－．日本総合愛育研究所紀要，34，93-111，1998.

河口てる子：看護調査研究の実際・尺度開発のプロセス．看護研究，435-441，1997a.

河口てる子：看護調査研究の実際　尺度の信頼性検討．看護研究，529-533，1997b.

河口てる子：看護調査研究の実際　尺度の妥当性検討．看護研究，89-92，1998.

茅島江子，桑名佳代子，江守陽子他：新生児の泣き声に対する褥婦の反応．母性衛生，29（4），467-468，1988.

近藤美佳，田淵紀子，広中啓子他：1ヶ月児の泣きに対する母親の反応　-第1報　困難感の実態とその特徴-．日本助産学会誌，14（3），162-163，2001.

Lind, J., et al. : Spectrographic analysis of vocal response to pain stimuli in infants with Down's syndrome. Dev. Med. Child Neurol., 12:478,1970.

Morsbach, G., & Bunting, C.: Maternal recognition of their neonate's cries. Developmental Medicine and Child Neurology, 21, 178-185, 1979.

Muller,M. : A Questionnaire to Measure Mother-to-Infant Attachment. Journal of Nursing Measurement, 2(2), 129-141.1994.

中島登美子：母親の愛着尺度日本版の信頼性・妥当性の検討．日本看護科学学会誌，21（1），1-8，2001.

奈良間美保，兼松百合子，荒木暁子他：日本版 Parenting Stress Index (PSI) の信頼性・妥当性の検討．日本小児保健研究，58（5），610-616，1999.

大井照：音声スペクトログラフによる泣き声の研究，第1編　正常新生児と脳障害児における泣き声について，日本新生児学会誌，13(2)，250 - 258，1973.

大井照，馬場一雄：泣き声と神経疾患，小児医学，6（6），1081-1097，1973.

太田にわ：日本版 MAI 尺度による母性愛着の評価と関連要因に関する研究（第1報）．日本小児科学会雑誌，105（8），867-875，2001.

菅原ますみ：抑うつ．堀洋道監修/松井豊編：心理測定尺度集Ⅲ　心の健康をはかる＜適応・臨床＞（pp.140-146），サイエンス社，2001.

田淵紀子：新生児の泣き声に対する母親の受けとめ方．ニューポート大学大学院行動科学部人間行動学科修士論文，1-76，1997.

田淵紀子：新生児の泣き声に対する母親の反応．日本助産学会誌，12(2)，32-44，1999.

田淵紀子，島田啓子，坂井明美：児の泣き声に対する母親の受けとめ方の質的分析．第11回北陸母性衛生学会学術集会講演集，34-38，1996.

田淵紀子，島田啓子，坂井明美他：生後1ヶ月児の泣きに対する母親の反応．金沢大学医学部保健学科紀要，22，35-43，1998.

田淵紀子，島田啓子，坂井明美他：生後1ヶ月児の泣きに対する母親の感情・情動反応．金沢大学医学部保健学科紀要，24（1），105-112，2000.

田淵紀子，島田啓子，坂井明美他：生後4～5ヶ月児の泣きに対する母親の反応．金沢大学医学部保健学科紀要，24（2），119-124，2001a.

田淵紀子，炭谷みどり，竹中友恵他：1ヶ月児の泣きに対する母親の反応 第2報　困難さの感情・情動とその要因 -．日本助産学会誌，14（3），164-165，2001b.

田淵紀子，島田啓子，坂井明美他：児の泣きに対する母親の感情・情動の特徴　―生後1ヶ月時と1年時の比較―．第22回日本看護科学学会学術集

会講演集，406，2002a.
田淵紀子，炭谷みどり，近藤美佳他：4ヶ月児の泣きに困難感を示す母親の感情・情動とその関連要因．日本助産学会誌，15（3），204-205，2002b.
田淵紀子，島田啓子，坂井明美他：児の泣きに対する母親の困難感　－生後1歳時における泣きの実態から－．日本助産学会誌，16（3），188-189，2003.
田淵紀子，島田啓子，坂井明美他：1歳児の泣きに困難感を示す母親の感情・情動とその要因．日本助産学会誌，17（3），114-115，2004.
Wasz-Hockert,O., et al. : Analysis of some types of Vocalization in the newborn and in early infancy. Ann. Paediatr. Finn.,9(1), 1963.
Waters, E., Deane K.E. : Defining and Assessing Individual Relationship:Q-Methodology and Early Childhood. In □. Bretherton & Waters E., Growing Points in Attachment Theory and Research. Monographs of the Society for Research in Child Development 50:41-65,1985.
Wolff, P.H. : The natural history of crying and other vocalization in early infancy.In B. M. Foss(Ed.), Determinants of infant behavior, 4, 1969.
脇田満里子，豊川恵子：新生児の泣き声の意味の理解―母子相互作用の観点から―．母性衛生，32（4），531-532，1991.

表1　対児感情評定尺度

花沢成一（1992）

	非常にそのとおり	そのとおり	少しそのとおり	そんなことはない		非常にそのとおり	そのとおり	少しそのとおり	そんなことはない
あかるい・・・・・・・	3	2	1	0	あまい・・・・・・・・・	3	2	1	0
よわよわしい・・・・・	3	2	1	0	くさい・・・・・・・・・	3	2	1	0
おもしろい・・・・・・	3	2	1	0	ういういしい・・・・・	3	2	1	0
めんどうくさい・・・・	3	2	1	0	こわい・・・・・・・・・	3	2	1	0
いじらしい・・・・・・	3	2	1	0	しろい・・・・・・・・・	3	2	1	0
いらだたしい・・・・・	3	2	1	0	うるさい・・・・・・・	3	2	1	0
たのしい・・・・・・・	3	2	1	0	すばらしい・・・・・・	3	2	1	0
やかましい・・・・・・	3	2	1	0	じれったい・・・・・・	3	2	1	0
いとおしい・・・・・・	3	2	1	0	やさしい・・・・・・・	3	2	1	0
わずらわしい・・・・・	3	2	1	0	てれくさい・・・・・・	3	2	1	0
まるい・・・・・・・・・	3	2	1	0	みずみずしい・・・・・	3	2	1	0
あつかましい・・・・・	3	2	1	0	はずかしい・・・・・・	3	2	1	0
うつくしい・・・・・・	3	2	1	0	うれしい・・・・・・・	3	2	1	0
うっとうしい・・・・・	3	2	1	0	むずかしい・・・・・・	3	2	1	0

表2 Maternal Attachment Inventory (Revised)

(Muller, 1994)

	Almost Always	often	Some-times	Almost Never
1 I feel love for my baby	a.	b.	c.	d.
2 I feel warm and happy with my baby	a.	b.	c.	d.
3 I want to spend special time with my baby	a.	b.	c.	d.
4 I look forward to being with my baby	a.	b.	c.	d.
5 Just seeing my baby makes me feel good	a.	b.	c.	d.
6 I know my baby needs me	a.	b.	c.	d.
7 I think my baby is cute	a.	b.	c.	d.
8 I'm glad this baby is mine	a.	b.	c.	d.
9 I feel special when my baby smiles	a.	b.	c.	d.
10 I lile to look into my baby's eyes	a.	b.	c.	d.
11 I enjoy holding my baby	a.	b.	c.	d.
12 I watch my baby sleep	a.	b.	c.	d.
13 I want my baby near me	a.	b.	c.	d.
14 I tell others about my baby	a.	b.	c.	d.
15 It's fun being with my baby	a.	b.	c.	d.
16 I enjoy having my baby cuddle with me	a.	b.	c.	d.
17 I'm proud of my baby	a.	b.	c.	d.
18 I like to see my baby do new things	a.	b.	c.	d.
19 My thoughts are full of my baby	a.	b.	c.	d.
20 I know my baby's personality	a.	b.	c.	d.
21 I want my baby to trust me	a.	b.	c.	d.
22 I know I am important to my baby	a.	b.	c.	d.
23 I understand my baby's singnals	a.	b.	c.	d.
24 I give my baby special attention	a.	b.	c.	d.
25 I comfort my baby when he/she is crying	a.	b.	c.	d.
26 Loving my baby is easy	a.	b.	c.	d.

Scoring:A=4, B=3, C=2, D=1, All items are summed for a single score.

表3 MAI-J

（中島，2001）

	ほぼ常にある	頻回にある	時々ある	あまりない
1 赤ちゃんに愛情を感じる	4	3	2	1
2 赤ちゃんといると暖かさと幸せを感じる	4	3	2	1
3 赤ちゃんと一緒に過ごす時間をもちたい	4	3	2	1
4 赤ちゃんと一緒に過ごすことを楽しみにしている	4	3	2	1
5 赤ちゃんを見ているだけでうれしくなる	4	3	2	1
6 赤ちゃんが私を必要としているのがわかる	4	3	2	1
7 赤ちゃんはかわいいと思う	4	3	2	1
8 この子が私の赤ちゃんであることがうれしい	4	3	2	1
9 赤ちゃんがほほえむととてもうれしくなる	4	3	2	1
10 赤ちゃんの目をみつめるのが好きだ	4	3	2	1
11 赤ちゃんを抱くのが楽しい	4	3	2	1
12 赤ちゃんが眠るのを見守る	4	3	2	1
13 赤ちゃんがそばにいてほしいと思う	4	3	2	1
14 赤ちゃんのことを他の人に話す	4	3	2	1
15 赤ちゃんと一緒にいるとうれしい	4	3	2	1
16 赤ちゃんを抱いてかわいがるのが楽しい	4	3	2	1
17 赤ちゃんが自慢だ	4	3	2	1
18 赤ちゃんが新しいことをするのを見るのが好きだ	4	3	2	1
19 頭の中は赤ちゃんのことでいっぱいだ	4	3	2	1
20 赤ちゃんの性格がわかる	4	3	2	1
21 赤ちゃんに私のことを信頼してほしい	4	3	2	1
22 赤ちゃんにとって私が重要な存在であることが分か	4	3	2	1
23 赤ちゃんの出すサインを理解できる	4	3	2	1
24 赤ちゃんに特別な注意を払っている	4	3	2	1
25 赤ちゃんが泣いているとあやす	4	3	2	1
26 赤ちゃんを愛することは容易だ	4	3	2	1

表4　PSI と日本版 PSI の因子構造の比較

PSI	日本版 PSI
子どもの特徴に関わるストレス（6 因子 47 項目）	子どもの特徴に関わるストレス項目（7 因子 38 項目）
親を喜ばせる度合い	親を喜ばせる反応が少ない
子どもの機嫌	子どもの機嫌の悪さ
子どもの受容度	子どもが期待通りにいかない
子どもの散漫性／多動性	子どもの気が散りやすい／多動
子どもの適応性	親につきまとう／人に慣れにくい
子どもが困らせる度合い	子どもに問題を感じること
	刺激に過敏に反応する／ものに慣れにくい
親自身に関わるストレス（7 因子 54 項目）	親自身に関わるストレス項目（8 因子 40 項目）
親役割による規制	親役割によって生じる規制
社会的孤立	社会的孤立
配偶者との関係	夫との関係
親としての能力についての感じ方	親としての有能さ
親の抑鬱	抑鬱・罪悪感
	退院後の気落ち
子どもへの愛着	子どもに愛着を感じにくい
親の健康	健康状態

（奈良間他，1999 より引用，一部改変）

表５　時期別の泣きへの困難感を表す項目と困難指標

時期	項　　目	指　　標			
		(4点)	(3点)	(2点)	(1点)
1ヶ月	子どもが泣いて戸惑うことがある	よくある	少しある	あまりない	ない
	だっこしてもなかなか泣きやまないことがある	よくある	少しある	あまりない	ない
	あやしてもなかなか泣きやまないことがある	よくある	少しある	あまりない	ない
	泣いた時自分なりの泣きやませ方がない	ない	あまりない	大体ある	ある
4～5ヶ月	子どもが泣いて戸惑うことがある	よくある	少しある	あまりない	ない
	だっこしてもなかなか泣きやまないことがある	よくある	少しある	あまりない	ない
	あやしてもなかなか泣きやまないことがある	よくある	少しある	あまりない	ない
	泣いた時自分なりの泣きやませ方がない	ない	あまりない	大体ある	ある
1年	子どもが泣いて戸惑うことがある	よくある	少しある	あまりない	ない
	だっこしたりあやしてもなかなか泣きやまないことがある	よくある	少しある	あまりない	ない
	夜泣き時の対応に困難を感じたか	よく感じる	少し感じる	あまり感じない	感じない
	泣いた時自分なりの泣きやませ方がない	ない	あまりない	大体ある	ある

（近藤他，2001．広中他，2002．田淵他，2003より抜粋）

表6　泣きに対する困難感に関連すると思われる要因

困難感の関連要因	内　　容
泣きの性質	かん高さ
	泣きの頻度
	泣き続け
	かんしゃく（1ｙのみ）
子のリズム	予定した泣き
	子のリズム
寝入りの状況	寝つきのよさ
夜間授乳負担	夜間授乳の有無
	夜間授乳に対する困難感
以前の泣きとの相違	泣き頻度比較
	泣き方比較
夜泣き	夜泣き現在（1ｙのみ）
	夜泣き過去（1ｙのみ）
子の心配	健康心配
	発達心配
子の理解	泣く理由
	夜の授乳知識
	理由なく泣き
	リズム知識
母親の健康状態	体調
	疲れ
	落ち込みの気分
睡眠の中断	夜間授乳による中断
	夜間の泣き（授乳以外の）による中断
睡眠に対する満足	全睡眠満足
	夜間睡眠満足
ゆとり感	ゆとり感
泣きへの対処と気がかり	泣きの気がかり
	泣き時のオロオロ
育児の見通し	泣きの見通し
	楽しい育児の見通し
育児負担感	育児負担感
	育児しやすさ
育児充実感	児との生活
	母親としての充実感
育児自信感	自分の対応に対する自信
	育児に対する自信
サポートの質	児の世話サポート
	家事サポート
	夫の精神サポート
	家族の精神サポート
サポート満足	児の世話サポートに対する満足
	家事サポートに対する満足
	夫の精神サポートに対する満足
	家族の精神サポートに対する満足
育児相談者	育児相談者の存在
干渉	周りからの干渉
生活の変化に対する思い	自分の時間がなくなることに対する思い
	想像していた生活と現実とのギャップに対する思い
妊娠の受けとめ	妊娠時の気持ち
育児経験	育児経験
性格	母親の性格傾向

表7　泣きに対する困難感に関連する要因の相関

（これまでの研究結果より一部抜粋）

関連要因	相関係数		
	生後１ヶ月時 (n=649)	生後４ヶ月時 (n=318)	生後１年時 (n=250)
泣きの性質	0.540****	0.454****	0.338****
寝入りの状況	−0.540****	−0.481****	
以前の泣きとの相違	0.475****	0.388****	
子のリズム	−0.348****		
育児経験	−0.380****		
母親の健康状態	−0.352****	−0.374****	
夜間授乳負担	0.316****		
睡眠に対する満足	−0.303****	−0.319****	
子の心配		0.336****	
夜泣き			0.448****
睡眠の中断			0.338****
育児負担感	0.614****		0.439****
育児の見通し	−0.583****	−0.567****	−0.503****
育児の自信感	−0.554****	−0.427****	−0.318****
泣きへの対処と気がかり	0.472****	0.370****	
生活の変化に対する思い	0.439****	0.377****	0.390****
育児充実感	−0.349****	−0.362****	
ゆとり感	−0.344****	−0.347****	−0.301****

**** p<.0001

表8 泣きに対する困難感尺度の構成と要因

分野	要　因	NO	項　目				
認知	子どもの泣きと育児観	1	子どもは	1.基本的に泣かせてはいけないと思う	2.できるだけ泣かせないようにしたいと思う	3.ある程度泣かせて育てたいと思う	4.思いっきり泣かせて育てたいと思う
	子どもの泣きの理解（泣きに対するとらえ方）	2	子どもが泣くと	1.とても気になる	2.少し気になる	3.あまり気にならない	4.全く気にならない
	子どもの泣き方の特徴	3	私の子どもの泣き方は	1.ソフトでやさしい	2.極一般的	3.かなり頑固	4.手がつけられない
	想像していた子どもの泣きと現実とのギャップ	4	想像していた子どもの泣きと現実に子どもが泣いた時のギャップは	1.かなりある	2.少しある	3.ほとんどない	4.全くない
	子どもの泣きと生活の変化に対する想い	15	子どもができるまでの生活とのギャップを	1.強く感じ、そのことを負担に感じる	2.感じるが、子どもができたのだから当たり前だと思う	3.あまり感じない	1.全く感じない
		17	子どもの泣き声を聞いていると	1.我慢の限界を超えて、自分が何をするかわからない（爆発寸前）	2.一刻も早く子どもの泣きから開放されたいと思う	3.１日のうち短時間でも子どもの泣きから解放されたいと思うことがある	4.子どもの泣きから開放されたいと思うことはない
環境	子どもが泣いた時のサポート（に対する満足度）	5	子どもの泣きについて、助けやアドバイスに応えてくれる人が	1.全くいない	2.ほとんどいない	3.少しはいる	4.たくさんいる
	子どもの泣きと夫婦・家族関係	8	子どもが泣くことで、夫や家族間の	1.問題が増えた	2.問題が生じた	3.問題はない	4.一層の絆を感じている
	子どもの泣きと母の健康問題	10	ここ最近の私の気持ちや身体の調子は	1.大変よい	2.まあまあよい	3.身体は大丈夫だが、気持ちはまいっている	4.身も心もくたくたである
知識と行動	子どもの泣きの解釈	6	子どもが泣いたときの理由が	1.ほとんどわからない	2.半分くらいはわかる	3.だいたいわかる	1.すべてわかる
	子どもが泣いた時の対処行動	7	子どもが泣くと、私はどうすればいいか	1.全く自信がない	2.あまり自信がない	3.少し自信がある	4.かなり自信がある
	子どもの泣きに対する対処能力	16	子どもが泣くと、どうしていいか、わからなくなることが	1.ほとんどいつもである	2.時々ある	3.あまりない	4.全くない
育児の自信・負担	子どもの泣きと育児充実感	9	子どもに泣かれると育児は	1.楽しいとは全く思えない	2.あまり楽しいものではない	3.楽しいと思える	4.楽しく喜びで満ちあふれている
	子どもの泣きと育児自信感	12	育児への自信が	1.とてもある	2.ある程度ある	3.あまりない	4.全くない
	子どもの泣きと育児の見通し	14	これから先の育児の見通しが	1.全くなく、不安が強い	1.あまりなく、不安がある	3.ある程度あり、不安はあまりない	4.あり、不安は全くない
	子どもの泣きと母のストレス・負担感	11	育児は、私にとって	1.かなり負担となっている	2.ある程度負担になっている	3.あまり負担ではない	4.全く負担ではない
		13	子どもが泣くと、ストレスを	1.強く感じる	2.少し感じる	3.ほとんど感じない	4.全く感じない
認知	子どもの泣きと母のパーソナリティ		性格傾向（神経質か楽天的かをＶＡＳ）				

表９　泣きに対する感情・情動尺度（受容的情動・非受容的情動全20項目）

ここ２ー３週間くらいの生活の中で、赤ちゃんの泣き声を聞いた時のことを想い浮かべて下さい。
以下の２０個のお気持ちについて１ー４のいずれかに○をつけて下さい。

1 かわいい	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
2 うれしい	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
3 何かしてあげたい	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
4 離したくない、抱きしめたい	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
5 幸せ	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
6 喜び	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
7 心はずむ	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
8 やっと泣いてくれた	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
9 楽しい	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
10 いじらしい	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
11 憎たらしい	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
12 がっくり	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
13 あせって落ち着かない	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
14 つらくて泣きたい	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
15 どうしていいかわからない	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
16 うるさくてイライラ	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
17 泣いてばっかり，もう嫌	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
18 不安（心配）	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
19 悲しい	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う
20 わずらわしい	1 ほとんど思わない	2 どちらかといえば思わない	3 どちらかといえば思う	4 大体思う

表10　泣きに対する感情・情動尺度（受容的情動・非受容的情動計10項目抜粋）

受　容　的　情　動	非　受　容　的　情　動
1 かわいい	6 憎たらしい
2 抱きしめたい	7 泣きたい
3 幸せ	8 イライラ
4 心はずむ	9 不安（心配）
5 楽しい	10 わずらわしい

表 11　対象の概要

n＝425

属性	区分	人数	(%)
年齢層	17 歳から 19 歳	5	(1.2)
	20 歳から 29 歳	203	(48.2)
	30 歳から 42 歳	213	(50.6)
出産回数	1 回	215	(50.6)
	2 回	155	(36.5)
	3 回	48	(11.3)
	4 回以上	7	(1.6)
子どもの性	男	186	(43.8)
	女	239	(56.2)
児の栄養方法	母乳のみ	204	(48.0)
	主に母乳でミルク少し	110	(25.9)
	母乳とミルクが半々	45	(10.6)
	主にミルクで母乳が少し	41	(9.7)
	ミルクのみ	24	(5.7)
仕事	している	5	(1.2)
	産後休暇中（育児休暇あり）	125	(29.4)
	産後休暇中（育児休暇なし）	28	(6.6)
	妊娠出産を機にやめた	139	(32.7)
	もともとしていない	127	(29.9)
住居	一戸建て	228	(53.8)
	マンション	48	(11.3)
	アパート	148	(34.9)
家族構成	核家族	294	(69.2)
	複合家族	128	(30.2)
出産施設での態勢	母児同室		
	1 日中	72	(16.9)
	主に昼間	25	(5.9)
	主に夜間	11	(2.6)
	希望時	194	(45.6)
	母児異室	120	(28.2)

表12 泣きに対する困難感尺度の構成因子と負荷量

因子名	第1因子	第2因子
第1因子「泣きに伴う育児負担」		
13 子どもが泣くとストレスを感じる	0.768	0.085
11 育児は私にとって負担である	0.694	0.191
17 子どもの泣き声を聞いていると開放されたいと思う	0.525	0.193
9 育児は楽しいと思えない	0.477	0.328
10 ここ1～2週間の私の気持ちはまいっている	0.449	0.319
15 子どもができるまでの生活とのギャップを感じる	0.431	0.219
第2因子「泣きの対応と育児の自信」		
7 子どもが泣くと私はどうすればいいか自信がない	0.140	0.802
6 子どもが泣いた時の理由がわからない	0.135	0.640
16 子どもが泣くとどうしていいかわからなくなることがある	0.370	0.520
12 育児への自信がない	0.312	0.506
14 これから先、育児の見通しについて不安である	0.435	0.439
固有値	4.283	1.304
寄与率（%）	22.030	19.183
累積寄与率（%）		41.213

因子抽出法：主因子法　回転法：ﾊﾞﾘﾏｯｸｽ法　N=425

表13　泣きに対する困難感尺度とBDI-Ⅱおよび感情・情動尺度との相関

尺　度　名	相関係数
泣きに対する困難感尺度	・・・・・
BDI-Ⅱ	0.421 ***
感情・情動尺度	
＜児が泣いた時＞	− 0.642 ***
＜普段、児と接している時＞	− 0.445 ***

Spearman's 検定　　*** $p<0.001$

表 14　対象の背景別困難感得点の比較

n＝425

属性	区分	人数	(%)	困難感得点　平均±ＳＤ（最小～最大）	
年齢層	17 歳から 19 歳	5	(1.2)	23.6±4.0	(18～28)
	20 歳から 29 歳	203	(48.2)	26.6±4.1	(14～38)
	30 歳から 42 歳	213	(50.6)	25.8±4.0	(13＝37)
子どもの性	男	186	(43.8)	26.2±3.8	(14～34)
	女	239	(56.2)	26.2±4.3	(13～38)
児の栄養方法	母乳	204	(48.0)	25.8±4.2	(13～38)
	混合	196	(46.3)	26.5±3.9	(14～37)
	ミルク	24	(5.7)	27.3±4.5	(15～37)
仕事	している	5	(1.2)	27.0±2.2	(24～30)
	産後休暇中（育児休暇あり）	125	(29.4)	26.2±4.7	(14～38)
	産後休暇中（育児休暇なし）	28	(6.6)	25.8±3.6	(16～31)
	妊娠出産を機にやめた	139	(32.7)	26.5±4.2	(13～37)
	もともとしていない	127	(29.9)	25.9±3.7	(18～35)
住居	一戸建て	228	(53.8)	26.2±4.1	(13～37)
	マンション	48	(11.3)	25.7±4.2	(14～36)
	アパート	148	(34.9)	26.4±4.0	(15～38)
家族構成	核家族	294	(69.2)	26.2±3.9	(14～38)
	複合家族	128	(30.2)	26.1±4.5	(13～37)
出産施設での態勢	母児同室	302	(71.8)	26.2±4.3	(13～38)
	母児異室	120	(28.2)	26.3±3.6	(19～35)

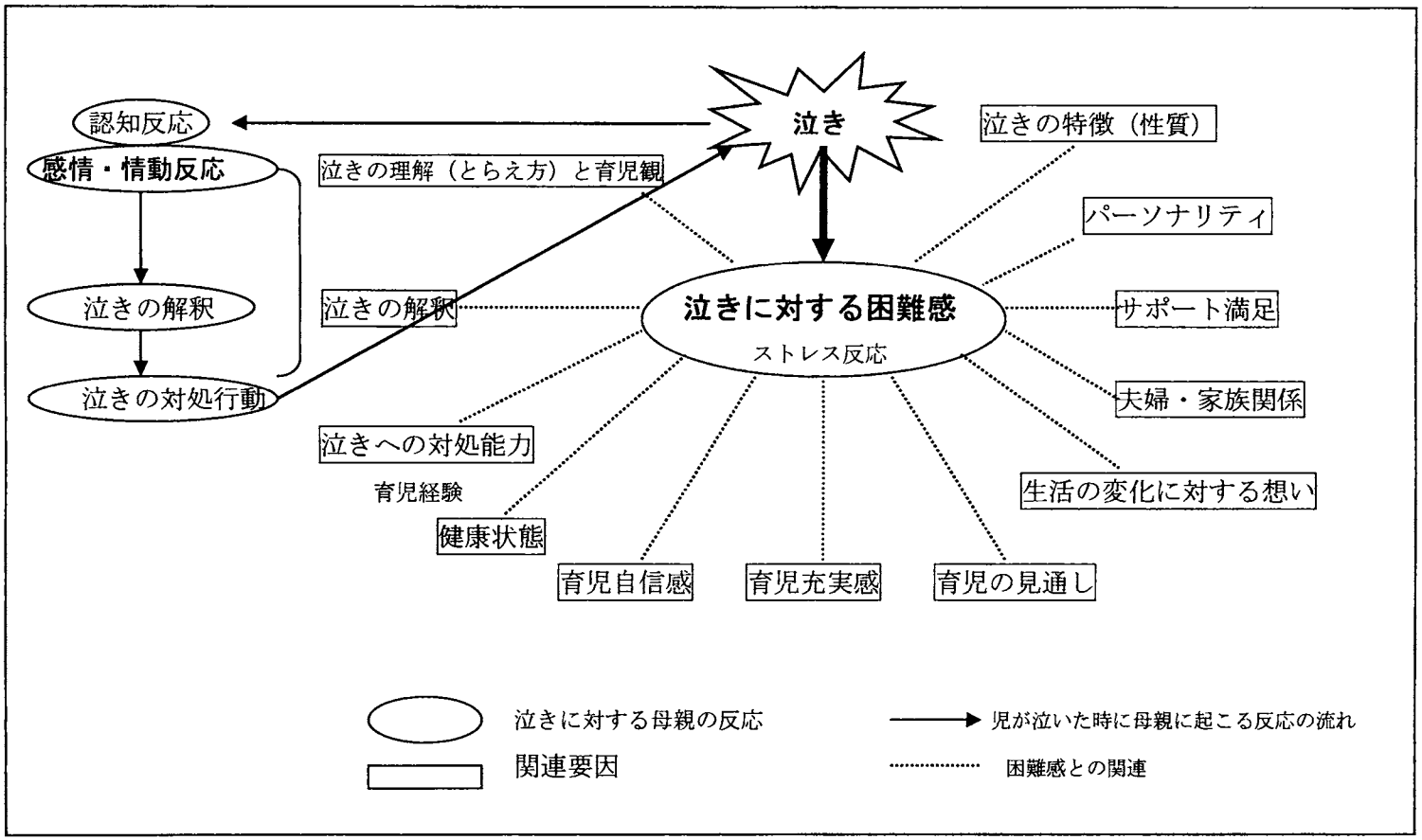


図１　泣きに対する困難感の概念枠組み

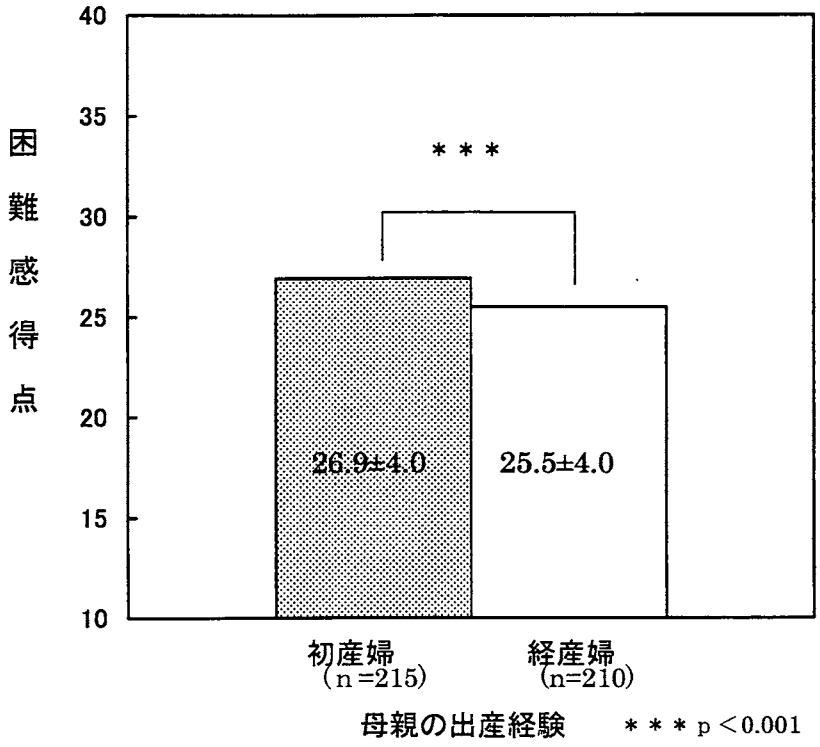
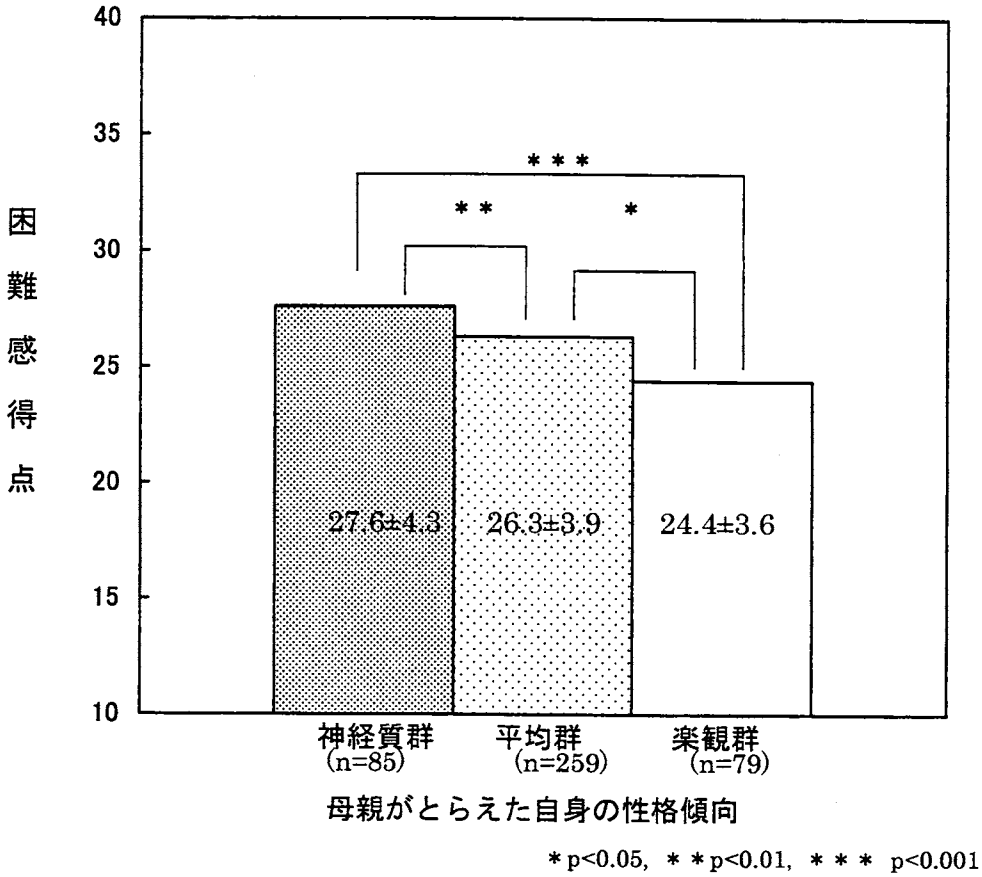
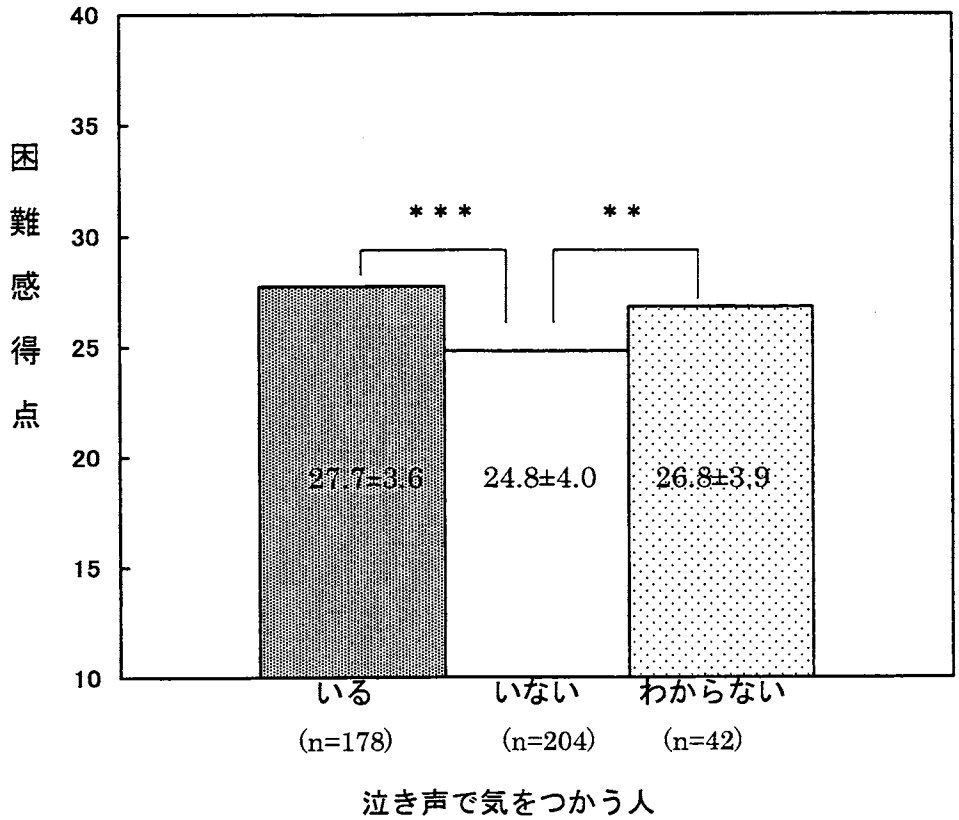


図２　母親の初経別困難感得点の比較



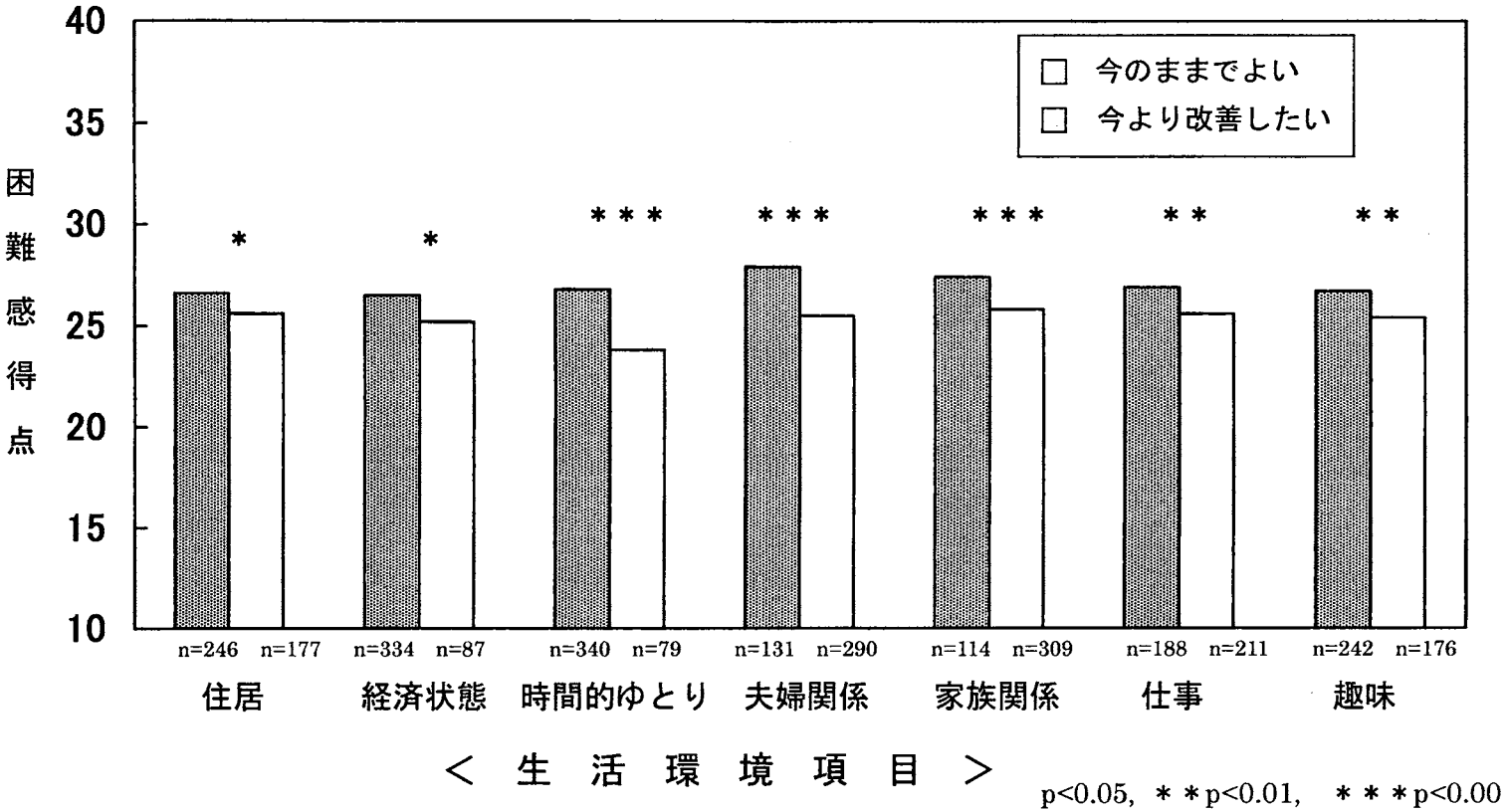
＊p<0.05, ＊＊p<0.01, ＊＊＊ p<0.001

図３　母親の性格傾向別困難感得点の比較



＊＊p<0.01 ＊＊＊p<0.001

図４　泣き声で気をつかう人の存在別困難感得点の比較



p<0.05, * *p<0.01, * * *p<0.00

図５　生活環境に対する想いと困難感の関係

第 19 回日本助産学会学術集会（2005. 3. 20）京都

一般演題発表抄録

１ヶ月児の泣きに対する母親の困難感尺度の開発

金沢大学医学部保健学科　○田淵　紀子
島田　啓子
亀田　幸枝
関塚　真美
坂井　明美

Ⅰ　緒言

子どもの泣きは、育児ノイローゼや虐待を生じさせる危険性につながることがあり、このような状況を予知し、育児困難感や不安の軽減に貢献できるケアへと活用することが急務である。これまでに、子どもの泣きに対する母親の困難感の実態と困難に関連する要因などを縦断的に明らかにしてきたが、今回、１ヵ月時点での子どもの泣きに対する母親の困難感尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討することを目的とした。

Ⅱ　方法

１．調査対象：北陸地方における病産院にて出産後、１ヵ月健診に訪れた母親

２．調査方法：自己記入式質問紙調査を承諾の得られた 26 出産施設において、研究目的および調査回答が健診および医療者の対応等に影響しない旨の説明を書いた文書を添えた質問紙調査を配布し、記入および郵送による返信を依頼した。

３．尺度の作成プロセスと調査で採用した測定尺度：これまでに行なってきた母親に対する面接と生後１ヶ月、4～5 ヶ月、1 年時の縦断的調査の結果より、母親の育児困難な状況やそれに関連する要因を整理し、泣きに対する育児困難感の概念枠組みを検討した。育児に関連した既存の尺度について文献検討を行い、Parenting Stress Index(PSI)日本版を参考に、子どもの泣きに着目した尺度項目を検討した。本尺度は、子どもが泣くことによって、母親が育児に対する困難な感情や負担に思うなどのストレスの程度を測定しようとするものであり、母親の育児に対する考え、泣きに対する思いや対処時の困難等 17 項目とした。それぞれの項目に対し、困難に感じる程度を 4 段階リッカート尺度とした。基準関連妥当性を検討するために、今回、感情・情動尺度（田淵他，2000）より受容的情動、非受容的情動各々5 項目ずつ計 10 項目に抜粋した尺度と既存のベックの抑うつ尺度第２版（以下、BDI-Ⅱ）を用いた。感情・情動尺度の評定は“大体思う（1 点)”～“ほとんど思わない（4 点)”の 4 件法で、得点が高いほど受容的傾向を示し、普段子どもと接している時と子どもが泣いた時の２状況の気持ちについてそれぞれ設問した。内容妥当性を検討するために助産学研究者３名に意見を求めた後、乳児を持つ母親を対象に予備調査を行い、理解困難な文章表現を修正した。

４．分析方法：統計解析ソフト SPSS11.5 J を用いた。主因子分析法、Pearson’s 相関係数を求めた。

Ⅲ　結果

1．対象の概要：調査用紙は 700 部配布し、366 名から回収(回収率 52.3%)した。有効回答は 352 名(有効回答率 96.2%)であり、初産婦 181 名(51.4%)、経産婦 171 名(48.6%)であった。

2．尺度項目決定のための分析

1）項目分析：泣きに対する困難感尺度項目の回答分布に偏りがみられたのは1項目で、その他の項目はほぼ正規分布を示した。また、項目間で負の相関を示すものがないか確認した。

2）I-T 相関分析：泣きに対する困難感尺度の項目間相関をみたが、r=0.8 以上で項目内容の類似しているものはなかった。また、尺度の各項目と全項目の合計得点の相関係数を求めたが、r=0.4 以下の項目が3項目みられたため削除した。

3．尺度の信頼性と妥当性の検討

1）因子分析：泣きに対する困難感尺度 17 項目のうち、項目分析と I-T 相関分析により除いた 14 項目を採択し、主因子分析法、バリマックス 回転した結果、固有値 1 以上の3因子が抽出されたが、因子負荷量が 0.4 以下の1項目を削除し分析した。第1因子は5項目からなり、「育児に対する思いと見通し」、第2因子は4項目からなり、「泣きの対応と育児の自信」、第3因子は4項目からなり、「泣きの受けとめとストレス」と命名した。第 1 因子の寄与率は 30.0%、第3因子までの累積寄与率は 40.2%であった。

2）Cronbach's α係数による信頼性：因子分析から選択された 13 項目のα係数は 0.83 であった（第1因子α=0.74、第2因子α=0.74、第3因子α=0.60)。

3）基準関連妥当性：「BDI-Ⅱ」との相関については、r=0.450, p<0.001 と有意な正の相関を示した。「感情・情動尺度」（α=0.85）との相関では、子どもが泣いた時の情動とは、r=−0.646, p<0.001 と有意な負の相関を示した。また、普段子どもと接している時と子どもが泣いた時の情動得点の差が大きいほど、困難感尺度の得点が高かった（r=0.467, p<0.001)。

Ⅳ　考察

本尺度の信頼性と妥当性の検討により、内的整合性、構成概念妥当性、基準関連妥当性が確認できた。PSI は親の育児ストレスを測定するものであるが、今回開発した尺度は、子どもの泣きに対する母親のストレスに焦点をあて項目を選定した。また、育児不安の本態は育児困難感であり、子どもへのネガティブな心的態度、感情から成ると言われている（川井他，1997)。今回開発した尺度は、特に子どもの泣きに対する母親の困難感に焦点をあてたものであり、川井らの育児困難感の内容と一部類似しているが、尺度構成はより精選されたものであり、さらに1ヶ月時期に焦点を当て測定できるという活用性がある。したがって、子どもが泣くことで母親が育児を負担に感じたり、困難な感情やストレスフルな感情を抱く状況にあるかどうかを測定する尺度として、臨床への適用の可能性が考えられる。

Ⅴ　結論

1）今回開発した子どもの泣きに対する母親の困難感尺度は、13 項目から構成された。

2）本尺度の信頼性と妥当性は、おおむね高い信頼性と妥当性が得られた。

資料

資料1

1ヶ月健診のお母様へ調査のお願い

御出産おめでとうございます。1ヶ月健診を迎えられ、お母様、お子様ともに健やかにお過ごしのことと思います。日頃の育児でお忙しいところ、大変恐縮ですが、赤ちゃんの泣き声を聞いたときのお母様のお気持ちや普段の思いについての質問紙調査のご協力をお願いいたします。

これまでに私たちは、育児にとても困難なお気持ちを抱かれているお母様のお役に立ちたいとの思いで、子どもの泣きとお母様の受けとめについて研究を進めてきました。今回は、その継続研究の調査です。調査用紙は全部で5枚、約15分程度です。お家に帰られてからご記入の上、同封の返信用封筒にすべての調査用紙を入れられてご投函頂ければ幸いです。

本調査結果は、研究以外の目的で使用することはありません。お母さまやお子さまの個人名が出たり、ご迷惑をおかけするようなことが一切ないよう充分配慮しております。

もし、調査にご協力いただけなくても、診療や看護サービスに影響するものではございませんが、ぜひご協力をお願い致します。

この調査に関するご質問や、ご意見などお気づきの点がございましたら、下記の連絡先までご連絡ください。

〒920-0942　金沢市小立野5-11-80　金沢大学医学部保健学科看護学専攻　田淵　紀子

TEL. 076-265-2557（直通）　E-mail tabuchi@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

1 あなたの年齢はおいくつですか？　（　　）歳

2 今回のお子さんの性別は?　1. 男　2. 女

3 出産は何回目ですか？　（　　）回目

4 お子さんは全部で何人ですか？　（　　）人 → 男（　）人，女（　）人

5 入院していた施設では？　1. 母児同室・・・（一日中　主に昼間　主に夜間　希望時のみ）
2. 母児異室

6 同居している家族に○印をつけてください →　夫，夫の父，夫の母，自分の父，自分の母
その他（　　）

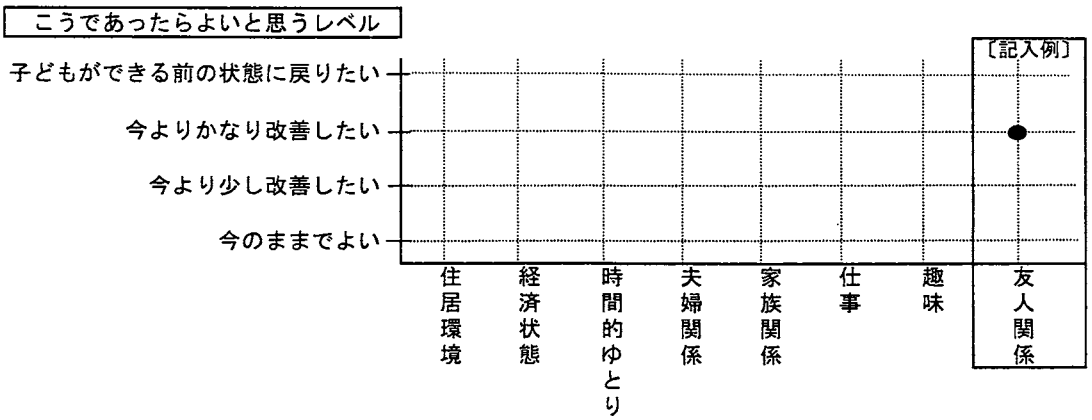
7 現在の栄養方法は？　1. 母乳のみ　2. 主に母乳でミルク少し　3. 母乳とミルクが半々
4. 主にミルクで母乳が少し　5. ミルクのみ

8 現在、あなたのお仕事は？　1. している　2. 産休中・・（育児休業の予定は？　ある　ない）
3. 妊娠出産を機会にやめた　4. もともとしていない

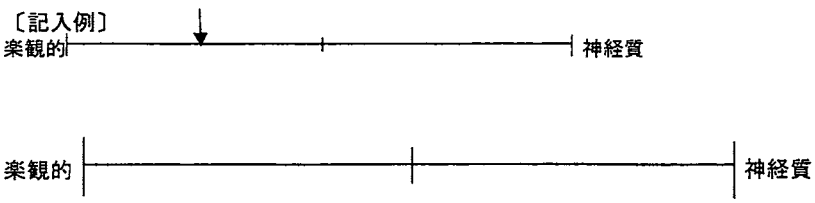
9 あなたの現在住んでいるお住まいは？1. 一戸建　2. マンション　3. アパート

10 子どもの泣き声で迷惑がかかるのではとあなたが気をつかう人は？　1. いる　2. いない　3. わからない

11 今の生活から望みたいことを、項目ごとにあてはまるレベルのところに○印を付けてください。



12 あなた自身の性格は？
ご自分の性格が１番当てはまると思うところに↓印を付けてください。



次の文章を読み、右の当てはまる番号に○をつけてください。

1 子どもは	1. 基本的に泣かせてはいけないと思う	2. できるだけ泣かせないようにしたいと思う	3. ある程度泣かせて育てたいと思う	4. 思いっきり泣かせて育てたいと思う
2 子どもが泣くと	1. とても気になる	2. 少し気になる	3. あまり気にならない	4. 全く気にならない
3 私の子どもの泣き方は	1. ソフトでやさしい	2. 一般的	3. かなり頑固	4. 手がつけられない
4 想像していた子どもの泣きと現実とのギャップは	1. かなりある	2. 少しある	3. ほとんどない	4. 全くない
5 子どもの泣きについて、助けやアドバイスに応えてくれる人が	1. 全くいない	2. ほとんどいない	3. 少しはいる	4. たくさんいる
6 子どもが泣いたときの理由が	1. ほとんどわからない	2. 半分くらいはわかる	3. だいたいわかる	4. すべてわかる
7 子どもが泣くと、私はどうすればいいか	1. 全く自信がない	2. あまり自信がない	3. 少し自信がある	4. かなり自信がある
8 子どもが泣くことで、夫や家族との間に	1. 問題が増えた	2. 問題が生じた	3. 問題はない	4. 一層の絆を感じている
9 育児は	1. 楽しく喜びで満ちあふれている	2. 楽しいと思える	3. あまり楽しくない	4. 全く楽しいとは思えない
10 ここ1～2週間の私の気持ちは	1. 大変よい	2. まあまあよい	3. 少しまいっている	4. かなりまいっている
11 育児は私にとって	1. かなり負担	2. ある程度負担	3. あまり負担ではない	4. 全く負担ではない
12 育児への自信が	1. とてもある	2. ある程度ある	3. あまりない	4. 全くない
13 子どもが泣くと、ストレスを	1. 強く感じる	2. 少し感じる	3. ほとんど感じない	4. 全く感じない
14 これから先、育児の見通しについて	1. とても不安である	2. 少し不安である	3. 不安はあまりない	4. 不安は全くない
15 子どもができるまでの生活とのギャップを	1. 強く感じ、そのことを負担に感じる	2. 感じるが、子どもができたのだから当たり前だと思う	3. あまり感じない	4. 全く感じない
16 子どもが泣くと、どうしていいか、わからなくなることが	1. ほとんどいつも	2. 時々ある	3. あまりない	4. 全くない
17 子どもの泣き声を聞いていると	1. 早く解放されたいと思う	2. かなり解放されたいと思う	3. 少し解放されたいと思う	4. 子どもの泣きから解放されたいと思わない

◎子どもと接するとき（普段と子どもに泣かれた時）のお気持ちについて、それぞれ以下の10個のお気持ちを右に示した1～4のいずれかの番号を□に記入してください。

	〔普段〕	〔子どもに泣かれた時〕
1 かわいい		
2 イライラ		
3 泣きたい		
4 わずらわしい		
5 楽しい		
6 幸せ		
7 心はずむ		
8 憎たらしい		
9 不安（心配）		
10 抱きしめたい		

〔例〕 かわいい 1 3

1 大体思う

2 どちらかといえば思う

3 どちらかといえば思わない

4 ほとんど思わない

この質問票には21の項目があります。

それぞれの項目に含まれる文章をひとつひとつ注意深く読み、それぞれの項目で、**今日を含むこの2週間**のあなたの気持ちに最も近い文章を**ひとつ**選び、選んだ文章の番号を○で囲んでください。

もし、ひとつの項目で同じように当てはまる文章がいくつかある場合は、番号の大きい方を○で囲んでください。

No.16（睡眠習慣の変化）やNo.18（食欲の変化）も含め、それぞれの項目で必ずひとつだけ選んでください。

1. 悲しさ
   0 わたしは気が滅入っていない
   1 しばしば気が滅入る
   2 いつも気が滅入っている
   3 とても気が滅入ってつらくて耐えがたい

2. 悲観
   0 将来について悲観していない
   1 以前よりも将来について悲観的に感じる
   2 物事が自分にとってうまくいくとは思えない
   3 将来は絶望的で悪くなるばかりだと思う

3. 過去の失敗
   0 自分を落伍者だとは思わない
   1 普通の人より失敗が多かったと思う
   2 人生を振り返ると失敗ばかりを思い出す
   3 自分は人間として完全な落伍者だと思う

4. 喜びの喪失
   0 自分が楽しいことには以前と同じくらい喜びを感じる
   1 以前ほど物事を楽しめない
   2 以前は楽しめたことにもほとんど喜びを感じなくなった
   3 以前は楽しめたことにもまったく喜びを感じなくなった

5. 罪責感
   0 特に罪の意識はない
   1 自分のしたことやすべきだったことの多くに罪悪感を感じる
   2 ほとんどいつも罪悪感を感じている
   3 絶えず罪悪感を感じている

6. 被罰感
   0 自分が罰を受けているようには感じない
   1 自分は罰を受けるかもしれないと思う
   2 自分は罰を受けるだろう
   3 自分は今罰されていると感じる

7. 自己嫌悪
   0 自分自身に対する意識は以前と変わらない
   1 自分自身に対して自信をなくした
   2 自分自身に失望している
   3 自分自身が嫌でたまらない

8. 自己批判
   0 以前よりも自分自身に批判的ということはない
   1 以前より自分自身に批判的だ
   2 あらゆる自分の欠点が気になり自分を責めている
   3 何か悪いことが起こると、全て自分のせいだと思う

9. 自殺念慮
   0 自殺したいと思うことはまったくない
   1 自殺したいと思うことはあるが、本当にしようとは思わない
   2 自殺したいと思う
   3 機会があれば自殺するだろう

10. 落涙
   0 以前よりも涙もろいということはない
   1 以前より涙もろい
   2 どんなささいなことにも涙が出る
   3 泣きたいと感じるのに涙が出ない

11. 激越
- 0 普段以上に落ち着きがなかったり緊張しやすくはない
- 1 普段より落ち着きがなかったり緊張しやすい
- 2 気持ちが落ち着かずじっとしているのが難しい
- 3 気持ちが落ち着かず絶えず動いたり何かしていないと気が済まない

12. 興味喪失
- 0 他の人や活動に対する関心を失ってはいない
- 1 以前より他の人や物事に対する関心が減った
- 2 他の人や物事への関心がほとんどなくなった
- 3 何事にも興味をもつことが難しい

13. 決断力低下
- 0 以前と同じように物事を決断できる
- 1 以前より決断するのが難しくなった
- 2 以前より決断するのがずっと難しくなった
- 3 どんなことを決めるにもひどく苦労する

14. 無価値感
- 0 自分に価値がないとは思わない
- 1 以前ほど自分に価値があり人の役に立てる人間だと思えない
- 2 他の人に比べて自分は価値がないと思う
- 3 自分はまったく価値がないと思う

15. 活力喪失
- 0 以前と同じように活力がある
- 1 以前と比べて活力が減った
- 2 活力が足りなくて十分動けない
- 3 活力がなく何もできない

16. 睡眠習慣の変化
- 0 睡眠習慣に変わりはない
- 1a 以前より少し睡眠時間が長い
- 1b 以前より少し睡眠時間が短い
- 2a 以前よりかなり睡眠時間が長い
- 2b 以前よりかなり睡眠時間が短い
- 3a ほとんど一日中寝ている
- 3b 以前より1～2時間早く目がさめて、再び眠れない

17. 易刺激性
- 0 普段よりイライラしやすいわけではない
- 1 普段よりイライラしやすい
- 2 普段よりかなりイライラしやすい
- 3 いつもイライラしやすい

18. 食欲の変化
- 0 食欲は以前と変わらない
- 1a 以前より少し食欲が落ちた
- 1b 以前より少し食欲が増えた
- 2a 以前よりかなり食欲が落ちた
- 2b 以前よりかなり食欲が増えた
- 3a まったく食欲がなくなった
- 3b いつも何か食べたくてたまらない

19. 集中困難
- 0 以前と同じように集中できる
- 1 以前ほどは集中できない
- 2 何事にも長い間集中することは難しい
- 3 何事にも集中できない

20. 疲労感
- 0 以前と比べて疲れやすいわけではない
- 1 以前より疲れやすい
- 2 以前ならできた多くのことが疲れてしまってできない
- 3 以前ならできたほとんどのことが疲れてしまってできない

21. 性欲減退
- 0 性欲は以前と変わらない
- 1 以前ほど性欲がない
- 2 最近めっきり性欲が減退した
- 3 まったく性欲がなくなった

計	

Copyright © 1996, 1987 by Aaron T. Beck.
Japanese translation copyright © 2003 by Aaron T. Beck.
Translated and adapted by permission of the publisher, by The Psychological Corporation, U.S.A. All rights reserved.
本印刷物の内容、形式を無断で転載または複写すると著作権法に触れますのでご注意ください

1ヶ月健診のお母様方への調査のお願い

このたび、文部科学省科学研究費の補助を受けて、産後早期の母親に対する育児困難感尺度の開発の研究を進めております。これは、育児にとても困難なお気持ちを抱かれているお母様をスクリーニングし、早く何らかのお役に立てないかと考えたものです。

そこで、1ヶ月健診に来院されたお母様で、質問紙調査にご協力して下さる方に、赤ちゃんの泣き声を聞いたときのお気持ちや普段の思いについてお聞きしたいと思っております。尺度の開発のため、既存のうつ尺度を併用して妥当性を検討したく、調査用紙は全部で4部（A4サイズ5枚）となっております。所要時間は15分程度です。調査用紙の入った封筒にお母様方への依頼の文書を添付し、御協力いただける方には、調査用紙を持ち帰っていただき、ご記入の上、同封の返信用封筒にてご投函していただくようお願いさせていただきます。お母様方にもし、調査にご協力いただけなくても、診療や看護サービスに影響しないことを明示しておきます。

この調査結果は、文部科学省への報告および学会への公表を予定しておりますが、お母さまやお子さまの個人名が出たり、ご迷惑をおかけするようなことが一切ないよう充分配慮させていただきます。

昨今、育児の孤立化、子どもが泣き止まないことでの虐待等、育児を取り巻く問題が増加する中、私どもの趣旨をお汲み取りの上、何卒、調査のご協力をお願い致します。調査用紙は産婦人科外来等、1ヶ月健診の場にて、お渡しいただければと思っております。

調査の御協力の諾否を別紙にて Fax,またはお母様宛の封筒の中に同封してあります返信用封筒を御使用いただきご返信下さいますよう重ねてお願い申し上げます（お電話、E-mail でのご返信でも構いません）。

金沢大学医学部保健学科看護学専攻
母性・小児看護学講座　助産学研究室
田淵　紀子　076-265-2557
島田　啓子　076-265-2544
坂井　明美　076-265-2547

この調査に関するご質問や、ご意見などお気づきの点がございましたら、下記の連絡先までご連絡ください。

〒920-0942　金沢市小立野5-11-80　金沢大学医学部保健学科看護学専攻　田淵　紀子
TEL. 076-265-2557（直通）　FAX. 076-234-4363（大学事務室内）
E-mail tabuchi@kenroku.kanazawa-u.ac.jp

調査協力施設名

（50 音順）

1　浅ノ川総合病院
2　荒木病院
3　あわの産婦人科医院
4　石川県立中央病院
5　浮田産婦人科
6　うちだマタニティクリニック
7　金沢医科大学病院
8　金沢医療センター
9　金沢社会保険病院
10　金沢市立病院
11　金沢大学医学部附属病院
12　恵愛会松南病院
13　恵愛病院
14　恵寿総合病院
15　公立加賀中央病院
16　公立能登総合病院
17　公立松任石川中央病院
18　小松市民病院
19　佐川クリニック
20　杉浦クリニック
21　辰口芳珠記念病院
22　ののいち産婦人科
23　深江レディスクリニック
24　ママ BB クリニック
25　めぐみクリニック
26　吉澤レディースクリニック

あとがき

調査にご協力いただいたお母様方に、心から感謝申し上げます。
また、本研究に御協力いただいた関係機関のすべての皆様に謹んで御礼申し上げます。

少子化が進む中、子育てが自然にできにくくなってきました。次代をになう子どもたちが、健やかに成長発達していけるような環境が整えられますよう望むところであります。その一旦を担うべくわれわれは、母子およびその家族にとって、よきサポートが提供できるよう日々努力していきたいと思っております。今回、育児困難感や不安の軽減に貢献できるケアへと活用するために、母親の児の泣きに対する困難感を測定するための尺度開発を行いました。今回開発した児の泣きに対する育児困難感尺度は、1ヶ月時を対象としたことから出生後早期の臨床への適用の可能性が示唆されました。今後、さらに尺度の精度を高め、スクリーニングとして活用していくことで、母子への支援につなげていきたいと考えております。

2005年3月

研究代表者　　田淵　紀子